

顧みて さらに新たなる気概を

平成10年度　第118回同窓会記念誌
山梨県立甲府中学校・甲府第一高等学校

平成10年度第118回

同窓会総会

顧みて さらに新たなる気概を

●日時―平成10年5月2日(土)
総会 午後1時　懇親会 午後2時

●場所―常　磐　ホ　テ　ル
甲府市湯村



母校 この一年

〈青春グラフティ〉

入学式——4月





「日新鐘」
江口俊博第10代校長により、古い伝統のなかにあってそれを忘れず新たな向上を求めようとの想いを込めて命名された。





運動会・球技会 ——6月・7月







一高祭 ——6月





強行遠足

10月











研修旅行 ——11月





スキー教室 ——2月







甲府中学校　校歌

一、我等は日本に生れたり
神の御代より一系の
皇統戴く我国に
生れしことのうれしさよ
皇国の栄えは天地と
共に窮りなかるべし

二、大和島根に山めぐる
甲斐の国あり水清き
郷土の歴史顧みよ
我等の務め軽からず
見よや南に富士ケ嶺は
皇国の鎮めと聳えたり

三、大海原の揺りやまぬ
波をも風をも凌ぎつつ
護れ皇国を諸共に
国民挙りて国のため
撓まず萎縮まず辟易がず
進むぞ大和ごころなる



甲府一高　校歌

一、甲斐の国　み中に建ちて
古へゆ　雄心伝へ
新たしき　世の鑑とし
勉めてむ　この学舎に

二、日に新た　また日に新た
弥高き　のぞみをもちて
真なる　理究め
励みなむ　若人我等

三、聳えたつ　芙容の高根
清き哉　甲斐の山川
もろともに　玉と磨きて
賛くべし　天地の化育



わが青春の応援歌

鶴城に

一、鶴城に桜花咲き
人は皆歓楽に酔ふ
われ一人落花を浴びて
前の恥花園に泣きぬ

二、秋来る健児の胸に
強き意気宇宙も空し
桜花の旗ひとたび振れば
醜の群れ微塵に飛ばむ
ヤッツケロ　ヤッツケロ
ヤッツケ　ヤッツケ
ヤッツケロ

起て起て起て健男児

起て起て起て健男児
覇気ある健児よ
自彊の盾をば振りかざし
破邪の剣とりて起て
撃てや懲らせや
われらが敵を
撃ちて勇姿を
世界に示すはこの秋ぞ
フレーフレー甲中（一高）

起て撃て勝て

起て撃て勝て
甲府一高　一高
その名ぞわが母校
仰ぐ芙蓉の峰さやか
穹天まさに轟かむ
見よ精鋭の集へるを
結べる眉に必勝の
誓ひは固しわれらが精鋭
おお
起て撃て勝て
甲府一高　一高
その名ぞわが母校

希望の光

一、希望の光　身に浴びて
若人の意気負うて立つ
いま選手等の門出を
空もとどろに　応ふらん

二、敵軍いかに　猛くとも
忍び伏せたる梓弓
鍛えし腕引きしぼり
敵のかぶとを　射落さん

三、見よ穹天の　雲は垂れ
覇権を握るは今なるぞ
蛟竜の意気胸に秘め
いざや起て起て　わが選手

平成10年度甲府中学・甲府一高同窓会定期総会

総　会(桜の間)
13：00

次　第

1　開会のことば
2　同窓会長あいさつ
3　学校長あいさつ
4　議長選出
5　議事および報告
(1) 平成９年度庶務報告承認について
(2) 平成９年度会計報告承認について
(3) 監査報告
(4) 平成10年度予算（案）について
(5) 次年度定期総会当番学年の委嘱について
(6) その他
6　祝辞
7　閉会のことば



懇親会(富士の間)
14：00

プログラム

1　校旗入場
2　甲府中・甲府一高校歌、応援歌斉唱
3　物故恩師・会員に弔意、黙とう
4　歓迎のことば
5　同窓会総会実行委員長あいさつ
6　同窓会会長あいさつ
7　祝辞
8　祝電披露
9　乾杯、懇談
10　強行遠足70周年記念映像観賞
11　黒柳徹子様講演
12　お楽しみ抽選会
13　引き継ぎ式（118回～119回）
14　万歳三唱
15　御礼のことば

ご　挨　拶



同窓会長
太田源一郎

更に強い絆を

若葉薫る５月の好季節に皆様と共に本校同窓会が盛会裡に開催されますことを心よりお喜び申し上げます。本校は明治・大正・昭和・平成と歩んで来た県内で長い歴史を誇る名門校であります。同窓会総会・懇親会は白髪の古い同窓生と新進気鋭の同窓生が恩師の先生を交え乍ら、青春の日を同じ学校に学んだ者に共通する活躍を話し合って交友を深めあうことにあります。創立120周年を２年後に控え、われわれ同窓会員はまず「和」をもって手をつなぎ合い、変轉する教育改革の中にあって、母校の本旨を貫徹する為の諸問題に対処し同窓会設立の目的に添うよう、ともども努め合いたいと思います。

総会開催に当り物心両面のご協力を頂いた昭和41年と昭和58年の卒業の会員各位の労をねぎらい心より感謝申し上げ、本会が更に強い絆で結ばれることを願って挨拶といたします。



校　長
雨宮　惇

同窓会の皆様に感謝して

山梨県立甲府中学校・甲府第一高等学校の平成10年度第118回同窓会総会の開催をお喜び申しあげます。

私は昨年着任しましたが、同窓会の皆様の物心両面にわたるご支援に度々励まされ、この機会に心から感謝申しあげます。

高校改革が進む中、平成10年度の普通科・英語科の入試に初めて推薦制度が導入され、２倍を越える志願者に改めて本校の偉大な歴史と伝統を感じました。

今年も４月８日に320名の一年生が入学しましたが、今後とも同窓会の皆様のご支援をいただき、本校のすばらしい伝統を励みとしながら、教職員・生徒一同努力したいと思います。

終りに、本校同窓会のますますのご発展と会員の皆様のご活躍を祈念し、合せて当番幹事の方々のご苦労に感謝申しあげます。



実行委員長
依田秀夫

ようこそ同窓会へ

第118回同窓会総会、懇親会を当番幹事として開催するにあたり、テーマを「顧みて、さらに新たなる気概を」にいたしました。

現在日本の社会状勢は、各方面で閉塞状態にあり、将来に向けてなかなか明るい展望がひらけません。我々はこのような状況に陥った要因を真摯に顧みて、「次の世代への責任を果し、21世紀に向けて新たなる気概をもってのぞみ、平和で安定した社会を構築する。」との決意を表したものです。

テーマにそった記念事業として、ユニセフ親善大使、黒柳徹子さんを招き、世界の情勢や平和で安定した社会がいかに必要かを母校一高生に講演していただきます。また同窓生のみなさま方の会員券販売や広告掲載でご賛同、ご支援いただきました資金の一部を世界中の悲惨な状況にある子供達に寄付いたします。みなさま方には心よりお礼申し上げます。

本日は、楽しい一時をお過しいただくよう幹事一同精一杯歓待申し上げます。

目　次

扉 “顧みてさらに新たなる気概を”…1

母校この一年〈青春グラフティ〉……2

甲府中学・甲府一高 校歌……6

わが青春の応援歌……7

ご　挨　拶……9

同窓会長　太　田　源一郎
校　　長　雨　宮　　惇
実行委員長　依　田　秀　夫

特集Ⅰ 子どもたちに未来を…11

飢え・児童労働・教育・女に生まれる
地雷・ユニセフ50

特別寄稿
起て日本　　恩田　宗……18

特集Ⅱ 教育問題★座談会……20

恩師健在・とっておきの一言……28

同窓生からのメッセージ……44

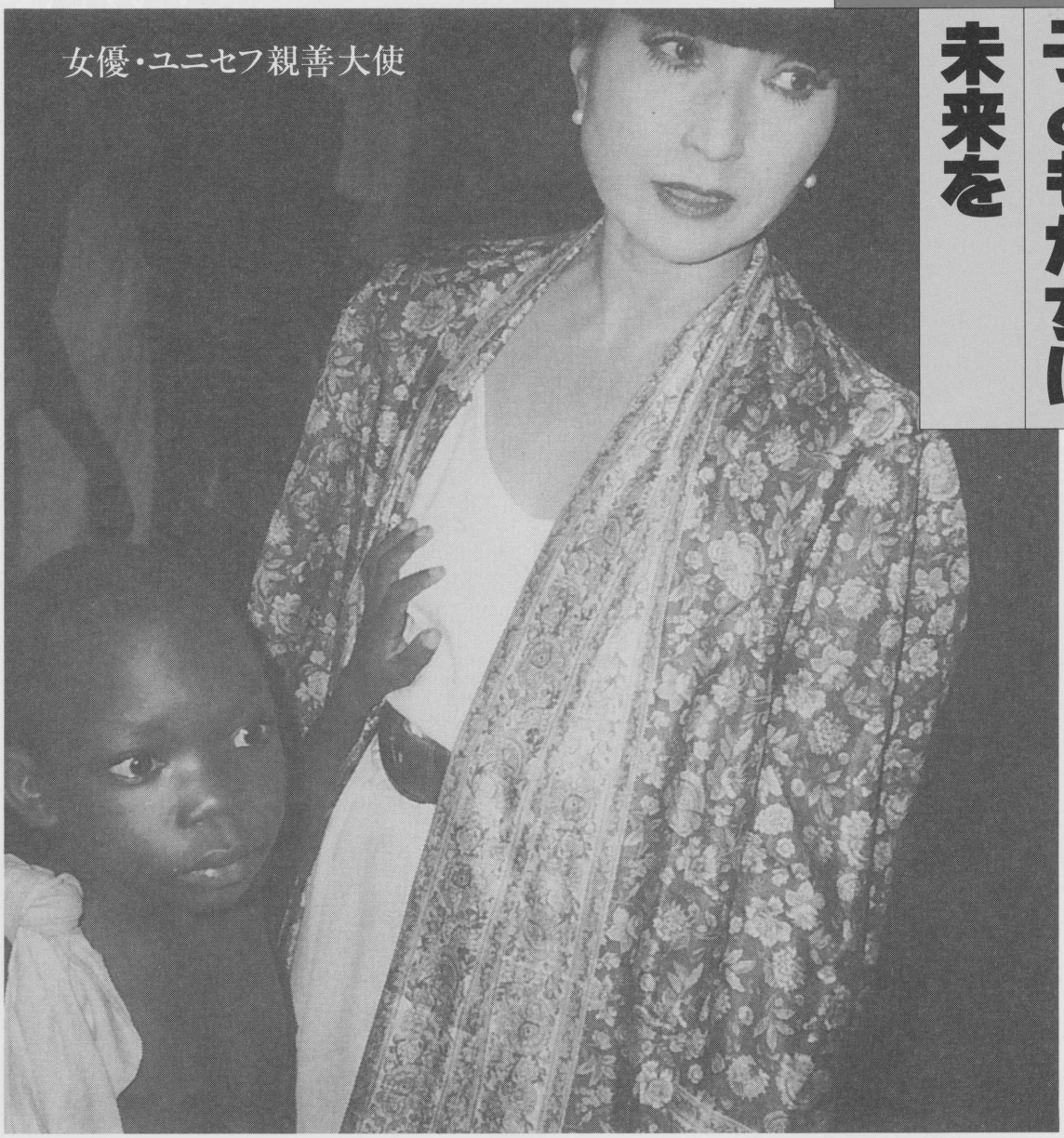
掲載広告インデックス……51

寄付者ご芳名……160

平成10年度役員名簿……161

編 集 後 記……162

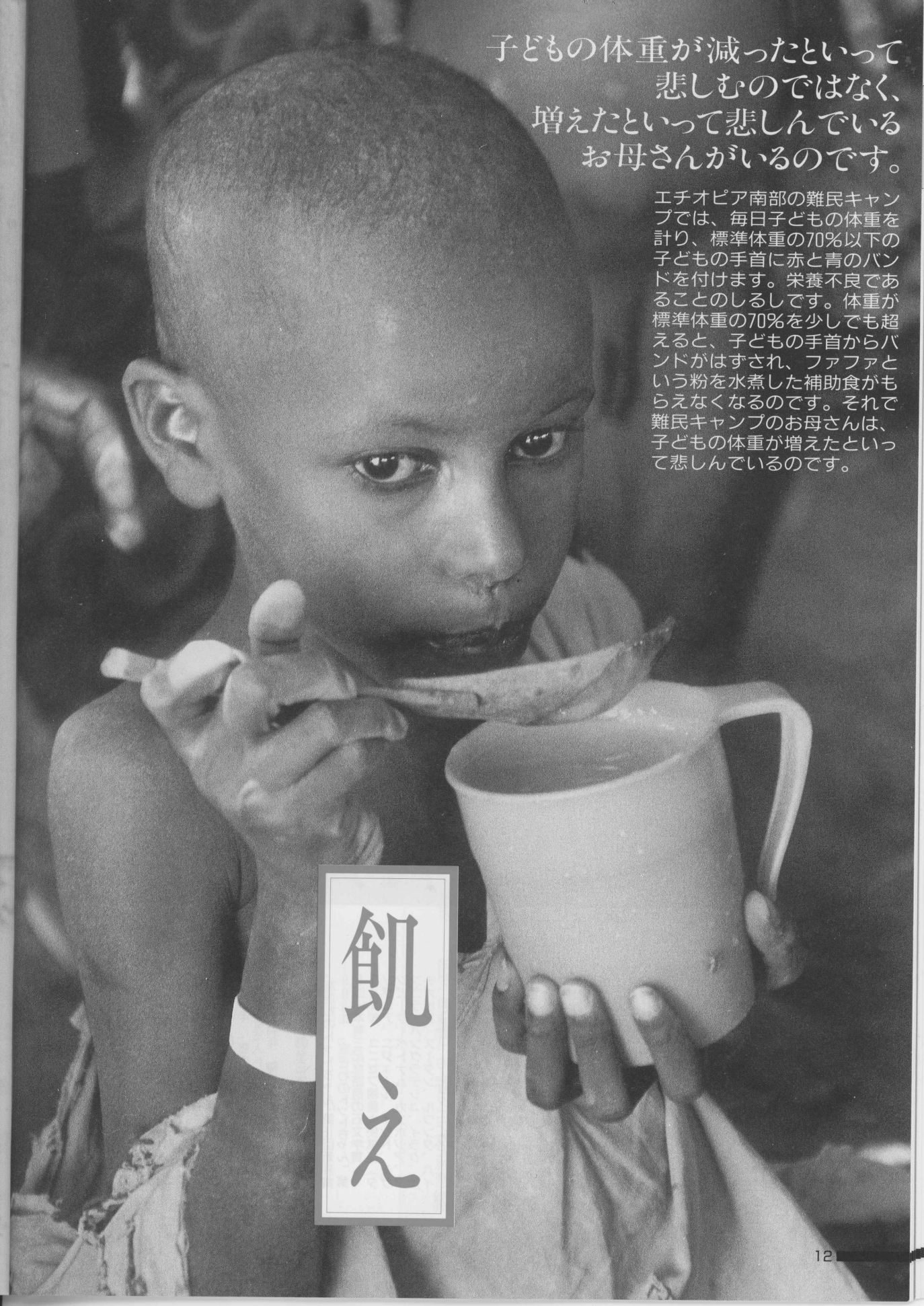
子どもたちに未来を



黒柳さん略歴

1954年　NHKよりデビュー
1961年　第1回放送作家協会女優賞
1971年　ニューヨーク留学（1年間）
1976年　『徹子の部屋』放送開始
「主婦の選んだテレビパーソナリティNo.1に選ばれる（1989年まで連続）
1977年　第9回テレビ大賞優秀個人賞
1978年　日本婦人放送懇談会大賞
1981年　「窓ぎわのトットちゃん」出版
「社会福祉法人トット基金」設立
国際障害者年　障害関係功労者内閣総理大臣賞
1982年　㈶全日本ろうあ連盟厚生文化賞
「窓ぎわのトットちゃん」第12回新評賞
1983年　「窓ぎわのトットちゃん」第5回山本有三記念路傍の石文学賞
1984年　ユニセフ親善大使就任（タンザニア、ニジェール、インド、モザンビーク、ベトナム、カンボジア、アンゴラ、バングラデシュ、イラク、エチオピア、スーダン、ルワンダ、ハイチ、旧ユーゴ、モーリタニアなど視察）
第35回NHK放送文化賞
1985年　「窓ぎわのトットちゃん」ポーランドのヤヌシュ・コルチャック賞
1987年　第1回ユニセフこども生存賞
1991年　第7回都文化賞
平成3年度外務大臣賞
1995年　第3回橋田文化財団橋田賞
1997年　第38回毎日芸術賞
第4回読売演劇大賞・最優秀女優賞と大賞
第23回放送文化基金賞
「トットちゃんとトットちゃんたち」出版

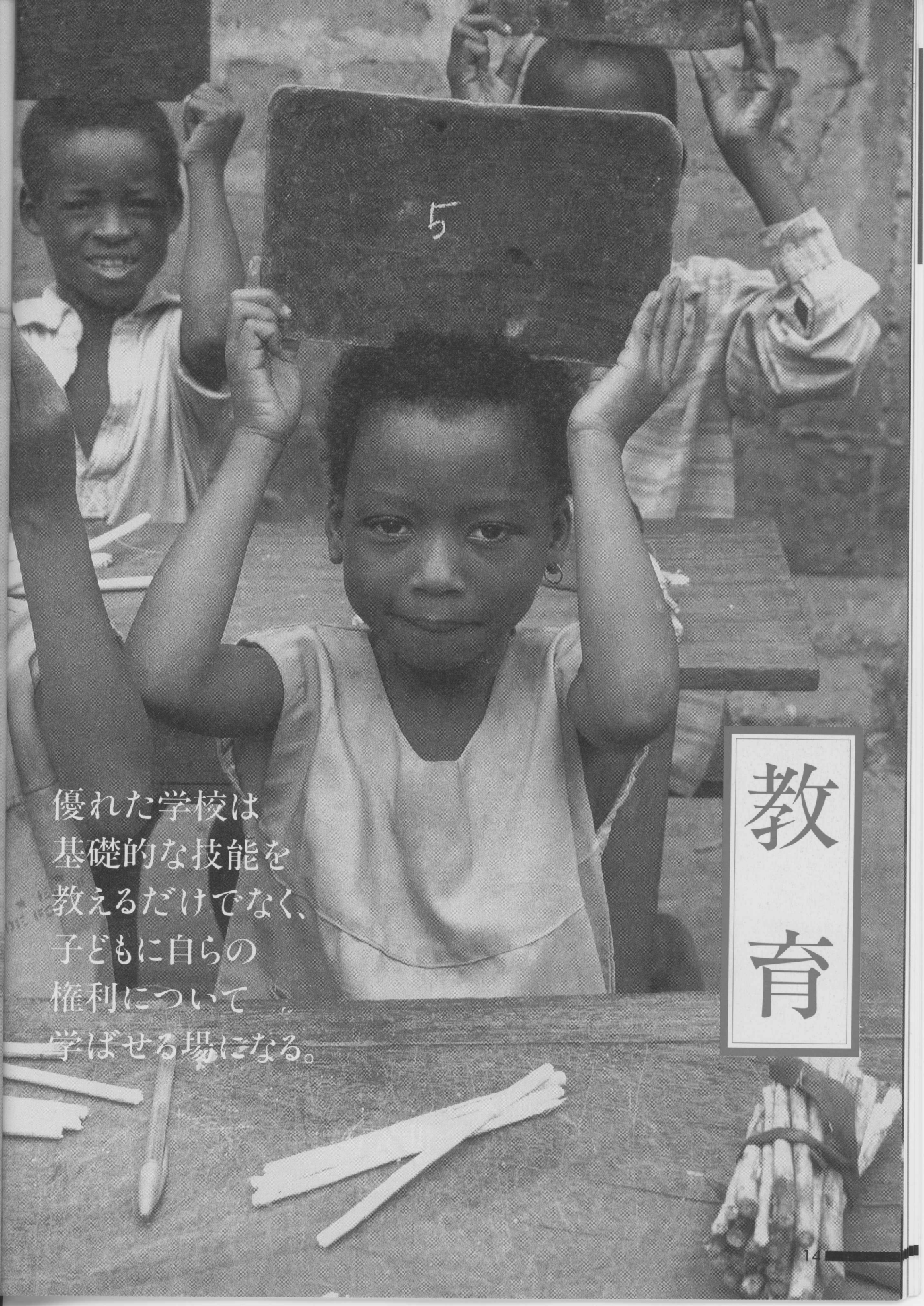

黒柳徹子さん


子どもの体重が減ったといって
悲しむのではなく、
増えたといって悲しんでいる
お母さんがいるのです。
エチオピア南部の難民キャンプでは、毎日子どもの体重を計り、標準体重の70%以下の子どもの手首に赤と青のバンドを付けます。栄養不良であることのしるしです。体重が標準体重の70%を少しでも超えると、子どもの手首からバンドがはずされ、ファファという粉を水煮した補助食がもらえなくなるのです。それで難民キャンプのお母さんは、子どもの体重が増えたといって悲しんでいるのです。
飢え

児童労働



家族のために、自分自身が生きるために、
働かなければならない子どもたちが
全世界に数億人います。



教育

優れた学校は
基礎的な技能を
教えるだけでなく、
子どもに自らの
権利について
学ばせる場になる。



女だからという理由で
人間らしく生きる機会を与えられない
子どもがいます。

女に生まれる


地雷には兵士の足音と子どもの足音を
聞き分けることができません
地雷
PERIGO BOMBA
PERIGO MINAS!
DANGER
MINES



ユニセフ（国連児童基金）は、第二次世界対戦で荒廃したヨーロッパの子どもを助けるための国連国際児童緊急基金（UNICEF）として、1946年に創設されました。
ユニセフが誕生して50年を経たいまも、子どもたちのために解決しなければならない問題が山積しています。
一人ひとりの子どもが健康に育ち、持って生まれた可能性を発揮できるようにするためには、なにをしなければならないのか。

■子どもたちに未来を

今、世界で悲惨な状況下にある子どもたちは数知れません。多くは、飢えと病気に苦しんでいます。私達一九四七～八年生れの者にとって、戦後の貧しい食糧事情の中で育ってきた事を思えば、決して他人事ではありません。

時をほぼ同じくして発足したユニセフの日本への援助のお蔭で数多くの子どもたちが助けられた事は、当時の私達にとって知る由もありませんでした。やがて卒業時の昭和四十一年には、最早戦後ではないと言われながら高度経済成長の真っ只中にいました。現在の世界の国々の中で、果して二十年先の未来を約束できるような国がどれくらいあるでしょうか。日本は経済大国と言われ、食料品も含め物が溢れています。しかしそのために失ったものも数多くあるように思います。

物が豊富過ぎる為の問題点により、自己中心的になり、助け合いの心がなくなりつつあります。しかしながら、現状の中で最低条件とも言える飢えと病気に関しては切実な状況です。私達に今出来ることは、これらの子どもたちに、一人ひとりが自分の意志で協力して、その活動を日本の子どもたちに伝えていく事が大事だと思います。

ここに日本ユニセフ協会の提供による世界の子どもたちの写真で訴えます。

（Y）

■財団法人日本ユニセフ協会
（ユニセフ日本委員会）
〒160-0015 東京都新宿区大京町31-10
TEL 03-3355-5022 FAX 03-3355-3810

■幼い難民を考える会
〒160-0012 東京都新宿区南元町6-2
TEL 03-3353-9947 FAX 03-3353-9739

■難民を助ける会
〒141-0021 東京都品川区上大崎4-5-26-2-101
TEL 03-3491-4200 FAX 03-3491-4192

特別寄稿

起て日本



アセアン貿易投資観光促進センター事務総長

恩田　宗

略　歴

昭和８年(1933年) ６月26日
　山梨県石和に生まれる
昭和27年(1952年) ３月
　甲府第一高等学校卒業
昭和31年(1956年) ３月
　東京大学法学部卒業
　11月　外務省入省
昭和50年(1975年) ７月
　在英日本国大使館　参事官
昭和52年(1977年) ６月
　国際連合日本政府代表部　参事官
昭和56年(1981年) １月
　大臣官房会計課長
昭和58年(1983年) １月
　アジア局　審議官
　12月　経済局次長
昭和62年(1987年) １月
　中近東アフリカ局長
平成元年(1989年)11月
　在サウディ・アラビア国特命全権大使
平成４年(1992年) ６月
　査察担当大使
平成５年(1993年)12月
　在タイ国特命全権大使
平成９年(1997年) １月
　アセアン貿易投資観光促進センター　事務総長

私は、１９５７年の秋、外務省語学研修員として米国に赴任した。外国に行くことがまだ珍しかった時代で、友人達が幟を持って羽田で見送ってくれた。旅立つ者に幟を振るのは、無事で頑張って来いと祈念し激励する為だが、送る方にも送られる方にも、頑張るのはただ本人の為だけではなく、双方の属する集団（家族、仲間、学校、会社より大きくは国）の為でもあるのだという暗黙の了解があった。日本人はそのような連帯感によって結ばれていた。各人がそれぞれの場所でそれなりに頑張れば、それにより全体が裨益し、各人も皆それなりに酬われ、それで世の中が円く治まる、と言う様な考え方をして来た。タラップを登りながら振り返ると、夕暮れの見送りデッキの上に白い幟が揺れているのが見えた。気恥ずかしくも思ったが、同時に何か責任のようなものを感じて緊張した。

敗戦から立ち上がったばかりの日本から行くと、アメリカは何から何まで輝いて見えた。１人当たりのＧＤＰで比較すると、日本は３２９ドル米国は２６８１ドルと８倍の差があった。大学のルーム・メイトから、母親が誕生日祝いにコーヒー・セットを送ったら日本製というだけで安物を呉れたと陰口されたという話を聞いた。

アメリカ人の対日認識も田舎ではそんなものかとがっかりした。しかし、日本製品の質がまだまだ悪かったことも事実だった。同期４人の研修員がワシントンに集った時、米国市場進出を目指すトヨタの寄贈したトヨペットが大使館に到着した。早速乗せてもらいハイウエイに出てみたが、初速が遅く、アメリカ人の運転手はこれでは危ないと言う。その夜、４人で大激論になった。まともな高速道路もない国が自動車を作ってアメリカに売るなんて無理だ、売るならもっと別の物にすべきだと言う議論が勝った。

アメリカの何処にいってもその豊かさには圧倒された。日本が何時このような水準に達することが出来るかと気が遠くなる思いをした。それでも、何も絶望する事はないと言う気もした。アメリカ人は、確かに積極的でよく働き人柄も悪くないが、日本人と比較して其れほど飛び抜けた能力の持ち主とも見えない。日本人が必死でやれば出来ない事は無いかもしれないと思った。アメリカには会社、大学、政府機関など日本の色々なところから留学に来ていたが、皆それぞれの立場で、何とか日本の遅れを取り戻したいと言う気構えで勉強していた。

ベトナム戦争が激しくなる頃には、ア

特別寄稿

起て日本

〈アジアの中の日本観〉

メリカとの貿易は日本の大幅な出超に変わった。時代も日本に幸いしたが、日本人が事務所や工場やその他の場所でそれぞれ懸命に働いた結果だったと言ってよい。そして、1980年代になると、日本の貿易黒字は更に大きくなり、それは日本の社会が閉鎖的で特種な慣行を維持しているせいだと非難される様になった。外務省の経済局で働いていたが、その様な議論に対する防戦をしつつも、日本も変わらなければ駄目だと感じた。世の中でも、規制緩和の掛け声が強くなり、日本の総理大臣が、明治維新と敗戦に次ぐ第三の開国の時が来たなどと言う様になった。それでも、我々日本人は、右肩上りの景気に幻惑されて、このままでは日本の行く先は袋小路だと言う事を本当に理解していた訳ではなかった。バブルがはじけた後でさえも、そのうち景気も回復するだろうと言い聞かせて、それで済ませて来た。

1994年、長期不況の様相を強めていた日本を後にタイ国に赴任した。前回の東南アジア勤務は、ベトナム戦争の最中で、アメリカの落とすドルで輸入した日本の消費財が溢れていた。当時、現地では、日本のオーバー・プレゼンスだとして反発もあったが、日本に対する尊敬や憧れや期待も大きかった。二十数年たって、日本の存在は更に大きくなっていたが、アジアの目に映る日本の輝きは、明らかに陰っていた。ルック・イーストを唱えていたマレイシアやシンガポールに於いてさえも、以前は、勤勉とか清潔とか安全とか正確とか肯定的価値を推奨する場合に日本を引合に出していたのに、最近は、硬直的だとか官僚統制だとか金銭万能主義だとか子供の自殺だとか家族の崩壊だとかマイナスの傾向に対し警告を発する時日本を例示することが多くなった。タイでも日本への留学生の数が伸びなくなった。何人もの元日本留学生から、息子も同じ様に日本で勉強させたいと思ったがどうしてもアメリカに行きたいと言うので仕方がないと言い訳するのを聞かされた。

アジアは、日本が、今、政治、経済、社会のシステムを大きく変革しなければならないと言う困難な問題に直面している

ことを知っている。そして、日本人がどうするかじっと見ている。我々は、先ずこの問題を解決して、初めて自らを救い、アジアの尊敬を再び取り戻す事が出来るのである。変革に伴う堪え難い痛みに心は怯むが、へこたれて居る場合ではない。日本にとり此れが初めての経験では無いではないか。1868年と1945年の日本人に出来たことが、我々に出来ぬはずが無い。古く慣れ親しんできた遣り方には捨て難い良さがあり、今日までの成功をもたらしたシステムを破壊する事には未練が残る。しかし、国境が低くなり人、物、金、情報が自由に飛び交う時代に入れば、日本の中でしか通用しない様な遣り方を為ていたのでは国際競争に生き残れない。要は気概の問題である。

起て、日本！

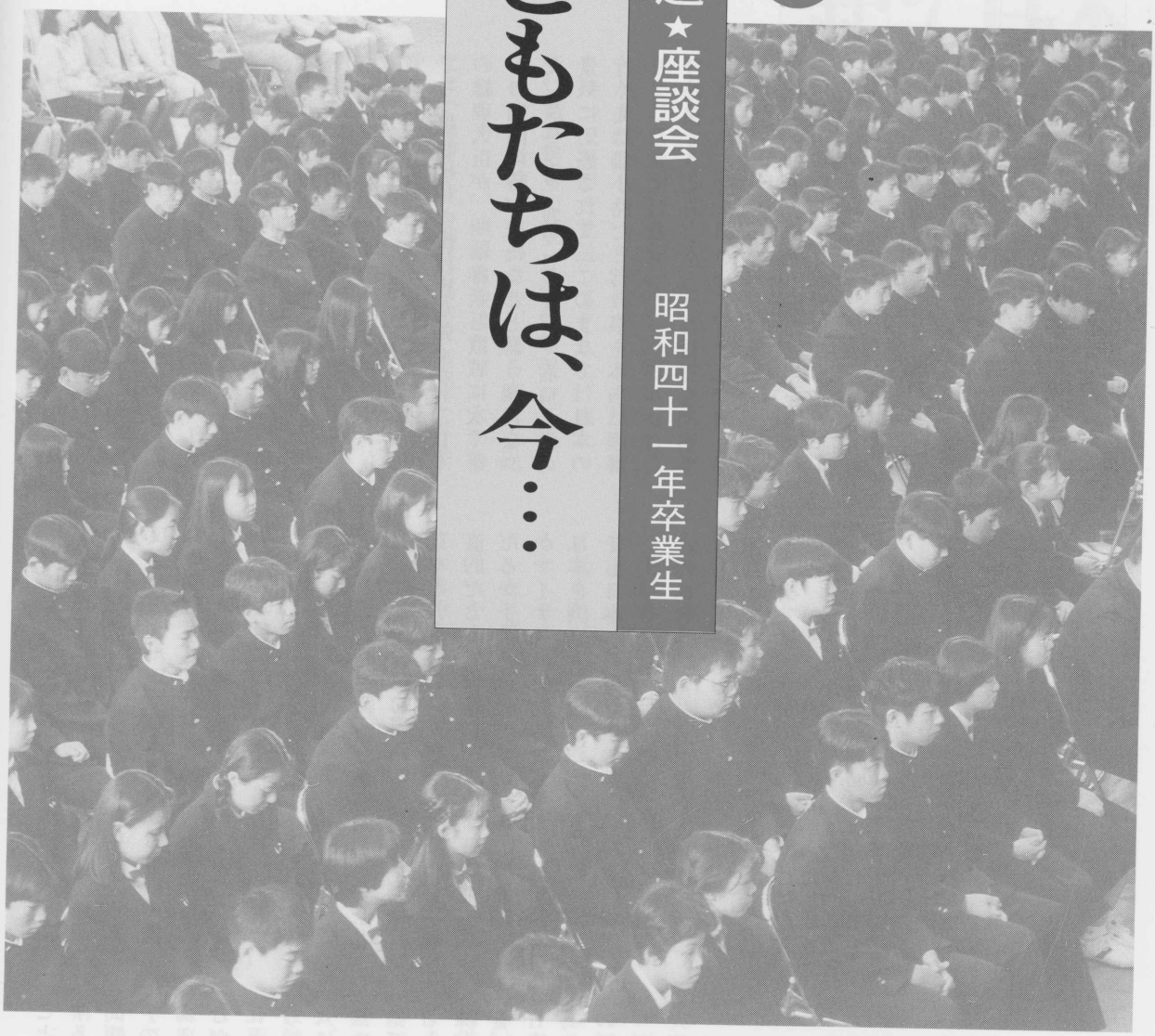
（了）

特集II

教育問題★座談会

昭和四十一年卒業生

子どもたちは、今…



今日の日本社会は、従来の制度が現在の実状にかみあわなくなり、政治経済から教育に至るまで、その歪みが現出しているように思われます。

そこで今回は甲府一高41年卒の同期生で、小・中・高の教師をなさっている方々と、母親の立場で、同期生の女性の皆さんに集まっていただき「教育問題」について、それぞれの立場から忌憚のないご意見を拝聴しようとこの座談会を開きました。

子を持つ親として、又教育の現場に携わっている教師として我々は何をなすべきかを考える一助になるなら、これに過ぎる喜びはありません。

本座談会は掲載に際して小学校の先生は「小」中学校は「中」高校は「高」、女性の方々は「母」という見出しとさせていただきました。ご諒承ください。

子どもたちは、今…

司会　最近少年犯罪が多発しております。そしてこの問題の解決を学校や先生方におしつけがちであります。私たちはこの少年達の問題を重く受けとめ、先生方と共に解決の糸口なりとも把握できればと考え、今回の座談会を開きました。教育問題言いたい放題ということで話をすすめてまいります。では、特に大きな問題を抱えている中学校の先生に口火をきっていただきます。

〝むかつく〟〝きれる〟

中　いま子ども達の間ではやっている言葉に、むかつくがあり、それがさらにすすむと、きれるという言葉になり、その結果としてナイフや刃物を使った事件に発展したのだといわれております。

司会　小学校や高等学校の生徒も「むかつく・きれる」という言葉は使かいますか。

小・高　「はい、そうですね」

中　この現象はテレビを含めて、マスコミ全体にも責任があると思います。もちろん家庭や学校にも責任はありますが、ひとたびある限界を飛び越した報道がされると、子ども達はそれがごく当り前のことと錯覚してしまうわけです。お話のむかつくも、その限界を飛び出し、きれるが容認されるような現象がおきてきたように思われます。

家庭教育「躾」

司会　むかつく・きれるは、子ども達の情緒が不安定で、些細なことで怒ったりして、辛抱や我慢ができないということだと思いますが、子ども達はどうしてむかついたり、きれたりするようになったのか何がその原因となっているのか、その辺のところを聞かせていただけませんか。

小　昔でしたら、基本的に躾については家庭で行われ、子ども達の学力を高めるのが学校や教師の努めであるという、ある種の考えが生きていたと思うのです。ところが今では、全てとは申しませんが、躾や生活指導を学校にお任せて、そのかわり学力を高める方は家庭や塾や通信教育でやるといった逆転現象がおきています。学校でももちろん躾や生活指導は行います。しかし躾については家庭教育が基本だと思います。近年多発している事件など、教育制度や学校にも問題はありますが、それ以上に家庭での躾に問題があると思えます。

司会　家庭の躾は以前からみると、その良し悪しは別として随分かわってきたように思えますが、特に変ったと思えるのはどんな点だとお考えですか。

小　家庭の躾の面で特に問題となるのは、近ごろ父親が子どもを叱らなくなったことです。母親は口をすっぱくしていっても、父親は黙っている。昔みたいに父親に威厳があって、普段は黙っていても、子どもがイケない時は怒りとばし、時には体罰をもって叱りつけた。そういう父親が少なくなってしまった。いつでも甘やかして、欲しがる物は何でも与える。そこで子どもの方には我慢するこころが育たない。むしろ母親の方がセーブしているといった状態です。

司会　お話はよく分かります。ところで、こうした傾向を正すには、何が必要なんでしょうか。

小　先ず父親の存在をクローズアップすることです。父性の復権が必要です。もっと父親がしっかりした態度で家庭教育に臨み、ものごとの善悪、社会の一員として守るべきルールを、きっちりと子どもに教えなければなりません。そうした地道な父親の家庭教育が減少したことも、少年犯罪増加の原因のひとつかと考えられます。

子ども達と家庭環境

司会　父性復権の話がでましたが、お母さま方としてはどのようにお考えでしょうか。

母　躾には注意しておりますので、素直な子に育っていると思いますが、ただ最近の子ども達は、昔の子に較べてどこか卑弱な感じがします。自分から何かをかち獲

子どもたちは、今…

ろうとする意欲が薄れているようです。これは家庭の中でだいじに育てられて、温室育ちになっているからでしょう。

近頃の子ども達は、外で遊ぶことが滅多になく、室内での遊びが多くなっています。それも、会話を交わすでなく、テレビゲームの画面をみんなで見ているとか、マンガ本を読むとかして、たしかにグループで集まってはいるのですが、個々ばらばらなのです。これではみんなで共に遊んでいるとはいえません。

司会　お互いに他人の領分に立ち入るのを避けているのでしょうか。

母　そのへんはよく分からないんですが、友達同士の遊びのなかで、競い合ったり、助け合ったりという、とにかく集団で遊ぶということが少なくなったことは確かです。そのため団体生活の中で当然生まれてくる協調性とか、我慢・辛抱・思いやりの心などが育ちずらくなっているように思えます。

怒りの対象は大きく

司会　先ほど小学校の先生から「逆転現象がおきている」との指摘がありました。高校の教育現場ではいかがでしょうか。

高　高校生になると、躾については親からの期待は少なくなりますが、最小限これだけはと思える生徒も沢山います。就職希望の生徒で、このまま社会におくり出した時、果して社会の中で通用するのかと心配になり、生活指導を重点的に行なっています。

先日、保護者との懇談会をもちましたが、後の席で私語を交わしている親がいましたので、「迷惑ですから私語はつつしんで下さい」といってやりました。親でさえこのような有様です。たいへん〝むかつき〟ました。「むかつく」という流行語については、私は常々生徒にこういっています。「小さなことにむかつくな」「もっと大きな問題に腹を立てろ」と。

生徒の指導の一環として、薬害エイズ問題で国や製薬会社と戦っている川田龍平君のことについての英文の教材を使っていますが、厚生省や大蔵省、また人類を破滅にみちびくような環境破壊について大いにむかついてもらいたいものです。

なぜ保健室に集まる？

司会　最近新聞紙上で保健室がとりあげられ、話題になっているようですが…

高　確かに学校生活の中で保健室が話題になっています。現在、高校生の場合、全国平均で一割以上の生徒が毎日保健室に出入りしています。実際に処置を必要とする生徒はほんのわずかだということですが、なんとなく保健室にきて会話を求める生徒が多いということです。

生徒のむかつく、きれるという現象の要因の一つとして、基本的な生活習慣ができていない、ということが考えられます。これは学校ではなく、家庭で行わなければならないものです。例えば、朝食をとってきていない生徒は平均で20パーセント以上おりますし、最近では遅刻する生徒がたいへん増えております。基本的生活習慣ができていないから、心の面で自己コントロールができません。幼児期に11時、12時まで親のペースで子供を寝かせない親がおおぜいいるという状況があります。その辺から遡って生活習慣が崩れているのだと思います。

コンビニの前に深夜たむろしている子供達がおりますが、昼夜逆転の社会現象もこういったことからおきています。

むかつく、切れるのもう一つの原因として、自分を認めてもらうということが生育歴のなかで非常に少ないのではないかと思います。

それは、受験とか学歴社会の影響を受けているのではないでしょうか。勉強ができなくても「あなたにはこういうところが良いところですよ」と、ちぃちゃな頃より認めてやれる場がほとんどなかったからです。

またもう一つ、家庭での父親のことが話に出ましたが、私達の世代は、経済の高度成長過程のなかで、父親が育児に参加していなかったとおもいます。そして今子供達を育てている次の世代も父親が育児に参加しておりません。こういう状態のなかで、子供達が学校へ来て最低守らなければならな

子どもたちは、今…

いルールを守れないとき、また集団社会のなかで許されない行為をした時、叱られます。それを受け取ることができないのです。それで挫折していく子供がけっこういるわけです。本来ならそんなことはすでに家庭で叱られてできていることであるのに、それがなされておらず、学校でそのことを叱られると、それを受け取れないで色々な問題が出て来ているのだと思います。

司会　先ほども父親像についてお話がありましたが、先生はどのようにとらえていらっしゃいますか…

高　私は、父性というのは、昔ふうの権威だけものであってはいけないと思っています。あくまでも子どもを理解したうえでの父性であり、それが母性と絡みあっていかないと駄目だと思います。

保健室にやってくる生徒は、母性を求めてここにやってくるのです。だから叱られると、自分ひとりではそれを受けいれられない生徒が多いのです。われわれ教師はそうした子ども達に、なぜ叱られたのかを理解させて教室に戻すよう指導していますが、噛んでふくめるように丁寧に話してやらないとなかなか理解できないようです。

中学校から高校にかけては、いわゆる思春期といわれる時期であり、体と心のアンバランスの状態で、自己を再構築する時ですからしょうがないと思います。小学校の先生方が心配されるように、家庭での基本的生活習慣を幼児期から身につけることが矢張り大事なことだと思いますネ。そして母親だけに任せるのではなく、父親も子育てに参加しなくてはいけないのではないでしょうか。「三子の魂」ではないですが、幼児期の教育はのちのちまで尾をひくことになります。

偏差値教育のツケ

司会　教育現場で色々な問題がおきはじめてきたのはいつ頃からでしょうか。

高　はっきりした年代は資料がないので申し上げられないのですが、およそ一五六年前からかと思われます。

高　共通一次試験が実施されるようになった頃ですので、やはり一五、六年は過っているのでしょうか。つまり偏差値教育が始まったころです。

司会　教育の現場に携わってこられた先生方としては、この偏差値教育をどんなふうにごらんになっていますか…

高　以前、進路職員研修会で講演をしていただいた教育学者が、こんな話をされていたのを記憶しています。

日本全国の学生が偏差値で序列化され、大学も入試の難易度もみな偏差値によって序列化されてしまった。この教育システムは、進学校のみにとどまらず、職業高校へさえも悪い影響を与えてしまった、と。

確かにその教育の歪みは、入試に合格した生徒にも影響を及ぼし、いつまでもコンプレックスを持ち続けたり、意欲をなくしてしまう子ども達をつくりあげてしまったようです。最近では大学生にまで生活指導が必要となってきたという、笑えない現実に直面しているともいわれております。

高　高学歴社会の到来で、大学進学熱が異状に高まったため、生徒達に多大な学習量を強いることになり、そのしわ寄せが中学、小学校へとおりてきているのが現状です。文部省の指導要領を見ると、一番悲鳴をあげているのは小学校ではないかと思われます。

司会　いまのお話とからめて、小学校の先生に現状をお聞かせいただきたいと思います。

小学校教育の難しさ

小　高校の先生から文部省の指導要領の話がでましたが、確かに以前と較べて学習量が格段に増えていることは事実です。例えば漢字学習にしても、一年生で八十字の漢字を学習しなければならない。これを全員の児童生徒に覚えさせ、書けるようにするのには大変な労力と時間がかかります。更に最近では、読み書きだけでなく、表現力の指導まで要求されています。これでは小学校の先生方も大変ですが、一番に悲鳴をあげているのは児童生徒ではないでしょうか。

小　子ども達はまったく大変です。学校か

子どもたちは、今…

ら帰ると遊ぶ時間もなく塾通いです。これでは基本的な生活習慣を幼児のうちから身につけさせようとしても、なかなか親子のコミュニケーションが図れません。

最近風邪が流行した時、「今日は勉強しなくていいから早目に寝なさい。早く寝ること、これが宿題です。風邪をひかないように九時までには必ず休みましょう」といって家に帰しました。それでも親御さんのペースに合せて遅くまでおきていた子ども達がいて驚かされた経験があります。

小　以前と較べて、様々な問題を抱えた子ども達が随分増えています。私たちも生徒一人ひとりに手をかけてあげたいのですが、40人学級ということで、全員の生徒に等しく目を配るのには時間が足りません。もう少しひとクラスごとの生徒が少ないとみんなに手をかけてあげれるのにと、いつもくやしい思いを味わっています。

司会　小学校の現状について貴重なご意見を聞かせていただきました。他の小学校の様子も伺いたいと思いますが…

小　最近、某雑誌で、小学校の高学年生の高に「荒」という字をあてて「荒学年」と表記していたのを見てドキリとしました。なるほど小学生でも高学年ともなると、その対応が極めて難しくなりつつあります。授業中でも教室がザワついていて、子ども達との好ましい関係がとりづらくなってきました。そのためもあってでしょうか、最近は高学年の担任希望が少なくなっていると言われてます。

司会　低学年はいかがですか。

小　一、二年生は特に困難です。一年生ぐらいの子供は、一人ひとりがそれぞれかってで、例えば先生が何かを話しても、聞いているような顔をしているんだけど、話し終った後、放っておくと、また訊いてきて、これがあたりまえです。最近の子供達は自分に向かって何々ちゃんと言われないと、自分達に言っているんだとは思いません。みんなに言っているうちは聞いていません。一人ひとりがバラバラで、また、やたらと先生を独占したがり、お母さんにでも甘えるように体にまとわりつくということなど、とにかく子供達が変ってきており、一年生の担任をしていると疲れてしまい、二年生への持ち上がれないということが起きています。

これはなぜなのかと考えてみると、一つは、子供達は兄弟が少ないため、常に自分に向って話しをされている育ち方をされてきています。一人ひとりが手をかけられており、昔に較べて、経済的にゆとりがあって手をかけられすぎて育てられてきているという状況があります。

もう一つは、幼児教育などの早期教育が個々の子供になされており、一年生に入って来る時、昔はほぼ同じぐらいの学力であったのですが子供達に学力差や、知識の差が出てきております。こういったなかで授業をすすめたり、子供達すべてと同じような関係をつくることはたいへん難しいことです。最近のナイフ事件などの背景として、こういった状況もあるのかなと思います。本当のナイフではないけれど、子供達はいつもナイフのようなものをつきつけられ、あるいは、それで傷つけられて来たのではないか。それが今に反映しているのではないかと思われます。

給食

司会　子供達の事件が多発し、学校が荒れはじめた時期について、共通一次試験導入時と期を一にするという話がありましたが、何か他に考えられることはありますか。

中　中学が荒れはじめた頃と社会体育（ママさんバレーなど）やカラオケが盛んになった頃と同じ頃だと思います。親が自分達の権利を主張して動きはじめた時、子供から離れていたことがいけないと思います。

こういうことを言うと、お母様方の言葉が止ってしまいますが、私は学校給食制度に問題があるという気がしてなりません。弁当の場合には、何がおいしかったとか、まずかったとかで母親との会話がすすみます。給食になると親と子の接点がなくなります。

学校給食というのは、子供達の一人ひとりに対応できず、所詮、無理です。例えば、

子どもたちは、今…

アレルギーに対して何が食べれない。お米でさえもアレルギーの対象となる子供もおります。野菜嫌いの子供がおりまして、親からのお願いで、無理して食べさせましたが、すぐ吐いてしまいました。給食でなくお弁当ならば、それに対応できます。また、給食というのは物を残すことを教えている指導になっている可能性が非常に大きいです。残飯の量たるやものすごいです。残飯のことは、家庭教育とは関係ありませんが、そのへんのことが、子供と親とが離れていく一つの原因をつくっているような気がしてなりません。

母　給食が問題になっておりますが、母親の立場からすると、今は女性も社会進出しており、給食でたいへん助かっています。弁当を作らない母親に問題があると言われますが、家庭に問題があるとすれば、父親を含めて二人の問題だと思います。お弁当をつくるのが良くて給食はだめだとは、単純には言えないと思います。

小　私は給食があって良かったなという経験がたくさんありました。親の仕事の関係で朝家に居ることができず、朝食を食べることができない子供がおりました。弁当を持ってくることも不可能だと思います。しかし、こういう子供にとって給食はたいへんありがたいものです。またみんなが同じ食事をとるということは教育上においても大事なことだと思います。

小　給食そのものには問題はないと思います。そのやり方に矛盾が現われることはあると思います。全部食べられる子が良い子で、残す子はだめだということでなく、食べても、食べられなければ、食べなくても良い。さっきの勉強のようにできなければ認められない、食べられなければ認められないという話になってしまい、また食べ方によい食べ方と悪い食べ方があるということになり、大人達が良い悪いを言い出すことに問題があると思います。まったく学習面と同じであり、こういうことが学習面でより顕著に現われており、子供達を今のような状況に追いやっているのではないでしょうか。

不登校といじめ

司会　ところで、最近刃物による殺傷事件が頻発しています。事件の背景には様々にファクターが想定できますが、相変わらず「いじめ」の問題がかかわっていると思えます。そこで「いじめ」や「不登校」について伺いたいと思いますが、先ず小学校の先生にお聞きしますが、小学生の中にも、いじめや不登校はありますか…

小　非常に残念なことですが「あります」といわざるを得ません。

司会　われわれは、学校でいじめにあってそれが原因で不登校になるケースが最も多いように考えているのですが、それで間違いないでしょうか。

中　そうとばかりはいえません。不登校の原因はもっと根が深く、単純なものではありません。

高　不登校のケースについては、文部省では六つの項目に分けています。母子分離型とか、息ぎれ型、情緒不安定型などなどです。

司会　なるほど、一口に不登校といってもいろいろのタイプの要因があるわけですネ…

高　更に文部省が示した六タイプも、現実にはハッキリと分離できない、より複合的な要因の混り合いが見受けられています。平均的要因ということで考えると、小学校では母子分離型が多く、高校生になると、今まで真面目にやってきた子が息切れ現象をおこしたり、神経症になったり、精神面での症状を示すピークともなります。そこから不登校につながっていきます。

高　うちの学校にも何人かいましたが、タイプはそれぞれに異なっていました。ひとつにはやはり世間の価値観と自分自身の価値観との間のギャップに圧し潰されるというケースでした。もうひとつは気が弱い。それは病的ともいえるほどで不登校になってしまったケース。また最近では体感リズムの不調によるものが増えています。昔のように、なまけとかわがままというだけで簡単に片付けられないケースです。

司会　小、中学校では不登校から退学になるケースはないと思いますが、高校

子どもたちは、今…

生の場合は不登校から退学につながる深刻な問題が顕在化しはじめていると聞きます…

高　高校に限らず中学校でも問題となっています。今までは退学生は年間十万人というのが全国的な目安でしたが、近年はすでに十一万人を越えてしまいました。山梨県の統計で申しますと、不登校退学は中学校で昨年のワーストワンになってしまいました。高校の場合はそれらが全国で中位にランクされていたと思います。

司会　よくいじめ事件がおきると、学校の責任者に「いじめがあったのかどうか」という質問が出されます。またそれに対して学校側からは「その事実はありません」とか「気がつきませんでした」といった答がかえってきます。現実に教育現場にいらっしゃる先生方として、校内でのいじめというのはあるのでしょうか、ないのでしょうか、そのへんから伺いたいのですが。

中　いじめは絶対にないといえば嘘になります。現実にはいじめのターゲットとなる生徒もいるわけで、いじめそのものも様々なケースがあると考えらえます。

高　以前はいじめ現象のタイプは、強い者が弱者をいじめるケースやまた弱い者同士が結束して強者にし返しをするようなケースが多かったのですが、ここ五年位前から、弱い者がより弱い者をいじめるケースがでてきました。

こんなところにも子ども達の行き場のない歪みが見てとれるような気がします。とにかくいじめは後を絶たないというのが現実です。

学校教育制度

司会　ここ数年学校制度の改革がなされてきておりますが、特に高等学校では、単位制の導入、総合学科校の設立、専門学科クラスの設置など、また全県一区制であるとか、推薦入試であるとか、総合選抜制度と矛盾する入試制度が実施されておりますがこの点について質問したいと思います。改革されたことですから、よい点もたくさんあり賛同できるところもたくさんあると思いますが問題提起というともありますのでこれについて問題点をうかがいます。

高　お隣りの長野県には、本県のような総合選抜制度がありません。従って高校の中で序列が生まれています。下位に位置する学校では、国公立大学に入学できる生徒がいないという普通科高校もあります。中学生の中にも、そうした高校なら行きたくないというので中学浪人をしたりする生徒も沢山いるという事です。そうした子ども達の中には、山梨の私立高校に通っているとの話もあります。幸い山梨県では総合選抜制度のおかげでそういったことはありません。

高　確かに総合選抜制度には良い面が沢山あります。一部には高校の独自性が失なわれたとの反論もありますが、高校での非行発生率の低さは全国でもトップクラスにあるというのは総選制の功と考えられます。

司会　ゆとりある学校生活をということで、学力面のみの判定でない推薦入学制度が実施されていますが、この制度についてはどうお考えでしょうか…

高　職業高校では五年ほど前からこの制度を導入しています。しかし、これはすべての学校ではありませんが、悪い影響も出はじめています。

司会　それはどういうことなんでしょうか。

高　推薦入学の場合、中学校から推薦してもらわねばなりません。そこで生徒たちは良い子ぶりっ子をして疲れはてて高校へ入ってきます。高校に入ると、先程の話のように「息ぎれ現象」が現れてきます。ご承知のように、推薦入学の場合は内申書が重視されます。内申書を少しでも有利に書いてもらうためにも、良い子を通さねばならないわけです。これではいたずら盛りの子ども達に大変な苦痛を強いることになり、その反動というか、精神的な歪みが、高校に入ってから出てくることを心配するわけです。現に職業高校の一部ではその心配が現れはじめています。

司会　そこで中学の先生方に伺いたいのですが、内申書というのは、学力はもちろんですが、生活面での評価もかなり重視されるわけですか…

特集II　教育問題★座談会

子どもたちは、今…

中　もちろんそういうことになろうかと思います。ただし高校の先生方が心配されるような状況にならないように、教師の方も常々気をつけて指導にあたっています。学友会活動やボランティア活動に積極的に参加した生徒は評価の対象となります。おかげさまでボランティア活動は大変活発になってきています。〈笑〉我々サイドとしては、中には計算づくでやっているような生徒に対して、適正な指導が必要だとは常々思っております。

まとめとこれからの一高へ

司会　われわれの一高時代は、本日ご出席をいただいた皆様をはじめ、多くの良き友人に恵まれました。またこの記念誌にご投稿をいただいた一組から十二組までの素晴らしい恩師にも恵まれ、伝統の重みを感じつつも自由で闊達な学園生活を楽しむことができました。

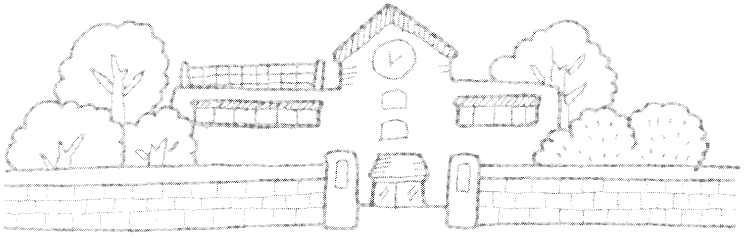
さて持ち時間も少なくなりましたところで、母校一高のこれからについて、ご批判なりご希望をお聞かせいただきたいと思います。

小　問題山積の教育の仕事に携っていると私達が通っていた当時の一高のあり方がそのまま良かったとは単純に思えなくなってきました。もちろん自分自身の人格形成にとって、一高での三年間が大きな意味をもち得たことは確かなんですが、だからといって、あの当時のあり方が完璧だったとはいえないように思えます。

小　私は、刺激を与え合い共に育つということを「共育ち」とよんでいるのですが、一高の学びの環境には、それがあったと思っています。共育ちということでの良さ、特徴を、これからの学校がどのような形でとりこんでいくかが大切ではないかと思っています。

今回は黒柳徹子さんに講演をしていただくこともそうですが、これからの社会は多様な人びとと共に助け合って生きていかねばなりません。そうした意味からも、多様な人びととの共育ちがますます求められる社会になろうと思います。これからの一高に是非、ひと味違った一高ならではの「共育ち」の風潮を考えて欲しいものだと思います。

司会　全国平等のセンター試験や、給食のこと、子供達にゆとりを持たせるための推薦入試制度など、良いことだと思っておりましたが、すべてに視点をあててみると良いことがある反面必ずそこにはたくさんの問題がふき出してきております。この座談会でその原因を探ってみましたが、子供達の問題はすべてが我々大人社会が起因しております。昨今多発している少年犯罪や問題は社会の歪みを写し出している鑑であると実感いたしました。これを機会にこれらの問題を少しでも解決する糸口を見出していきたいと思いますのでまた次の機会を設けたいと思います。



恩師健在

―とっておきの一言―



■昭和41年3月卒業生を担任された先生方に寄稿していただきました。

恩師健在
とっておきの一言



よき時代だった六年

一組担任　山村鉄夫

甲府一高にはずいぶん世話になりました。最初赴任した昭和三十七年から六年間、教頭としての昭和五十三年の一年間、それから昭和五十八年から校長としての三年間、計十年の間、多くの生徒・父兄・先輩・同僚その他の数知れぬ人々の恩によって生かされて来たようなものでした。

思いがけず市川高校から甲府一高へ転任がきまった時、異常なほど緊張したことが思い出されます。そんな私にまわりのひとは色々のことを言いました。

「秀才ぞろいの生徒たちばかりだから新しい先生には、その実力をためすため色々難しい質問を用意して授業にのぞむそうだよ」と言われたことにはびっくりしました。

最初の授業は古文でした。万葉集の歌でした。幸い私の得意な分野でしたので、徹底的に下調べをしたこともあって、立往生するようなことはありませんでしたが、なかなか生徒たちのほこ先は厳しいものがありました。

しかし現代国語はだめでした。特に入試問題にはてこずりました。冷汗三斗でした。今でも共通一次テストの国語の問題をやってみますが、古文と漢文はだいたい満点近いですが現代国語はだめですね、散々な目にあいます。

でも、この六年間の教科的な悪戦苦闘は私に国語の力をつけてくれました。生徒たちの為に私は上昇してきたように思います。そんなことがあって、総選になって南高校へ転任してからとても役に立ちました。

当時権威のあった、ある「模擬試験」に私の作った問題が採用されたりしました。そして国語の授業が楽しいようになりました。何にしても、あの頃の一高の生徒は実力のある者が多かった。先生方も素晴しかった。国語の神様、数学の神様、生物の神様などと言われるすごい先生が多かったし名物先生も数えればきりがないくらいでした。

強行遠足の監察中の先生が酒を飲んで、行方不明になり、皆で探しまわったりしたこともありました。

麻雀をやりすぎて家に帰りそびれ、夜半日新ホールの丸山さんを叩きおこして泊めてもらった懐しい思出もあります。

今のように生活指導上の問題はほとんどなく、われわれは教科指導に精魂を傾け、よく学び、よく遊びました。

東大を受験した生徒がしょんぼりとして小生の宅へやって来て「どうも試験の結果がよくないようだ。予備校へ行く準備をしたいんだがどこがいいでしょうか」といった類の相談がほとんどでした。その生徒が合格を知ったときのあの笑顔は忘れることができません。今からは想像できないような静かな充実した甲府一高の六年間でした。

現世では、あまりにも学校に色々なことを持ちこみすぎています。守備範囲が広すぎます。先生方はそれにふりまわされています。子供の悪い所を見ても「あまりキツく注意しないようにしています」と最近会った教師は言っています。これでいいのでしょうか。何とか教育の世界にきちっとした静謐な空気をとりもどしたいものです。独立独歩的な教育の樹立を願いたいものです。そんなことを希いながらこの稿を書きました。

最後に昭和四十一年強行遠足の時にうたった拙歌一首を披露し擱筆します。

裾原を次々に来る生徒らの
吐く息白く朝明けにけり

恩師健在
とっておきの一言



我がクラス

二組担任　**蘊原　幸**

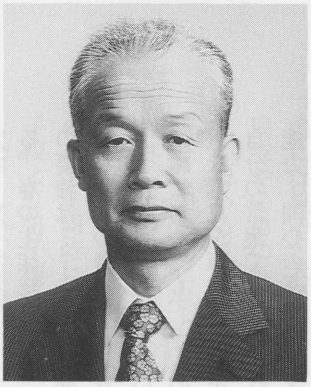
羽子板に羽子、富士山に初日の美しい色彩「お元気ですか、今年は甲府一高の同窓会の当番の年（五〇才）なので、皆で去年より頑張っています。五月二日お待ちしています。ときわホテル二時より」と三年のクラスのAさん。嬉しかった。五〇才ときいてびっくり。昨日のように思っていたのに卒業してからもう三十八年もたったとは。一方、謹賀新年で始まり末尾に一言「昨年は大不況にもかかわらず無事にすごすことができました。今年もがんばります」結構、大いに頑張れよと表を返しても住所も名前もない。七ケタの郵便番号あり。「ぽすたるガイド」をひっくり返すと町名がありました。笑顔が何ともいえない同じ三年のW君。そそっかしいね。これもその上をゆく担任の影響？虎の親子に今年も嬉しい年頭の挨拶も三年のOさん。あの笑顔が忘れられない。何時だったかD高校でばったり行き会い、「やあ元気だね」と言ったきり、暫く笑顔を見合わせていたものだった。

思えば三年は愉快なクラスだった。応援団長から野球部・柔道部のキャプテン級まで錚々たる面々がそろっていた。秋も深まったある日の放課後、教室の後の大分傷んだロッカーを来年の後輩の為にと皆でベニヤや板きれ、鋸や金槌を持ってきて、ゴキゴキトントンと賑かに破れた穴などを繕って見事？に修理したのも思い出の一つだ。また、誰かがこんな話をしてくれた。「夏休みに教室へ毛布を持ちこんで、泊りこみで勉強したけど涼しかったよな」と。本当？知らぬは担任ばかりなりか。無理もない、酷暑の街中で騒音とアスファルトの熱気の蒸し風呂じゃ勉強できっこない。三階は風通しが良いんだから、さぞや涼しく勉強できたことだろう。その本館はもうないけれど…

他方、大きな寿の文字を中心に「長男も今年は大4、昨夏は単身アメリカ大陸を横断しました。長女は中3、私の精神年令は長女に合わせています」とは二年の時のTさん。嬉しそうな顔が目に見えるようだ。どうやら子供さんたちは、ほとんど大学生か中には卒業した人もいるだろう。早いものだね。もう一周してしまったなと、つくづく感じさせられた。「瑞気集門」に「長女は年女、二女は成人式です。私は五十路に突入です。一高の同窓会の当番となっています」と豪快な挨拶は一・二年一緒のKさん。ついこの間、二人に背丈で追い越されましたと話していたのに、もう立派なお嬢さんに成人の様子、どんなにか嬉しいことだろう。その笑顔が目の前に浮かんでくる。寅の大きい字を背景にI君。二・三年が一緒。つい先頃、両学年のクラス会の開催に大いに尽力し皆で楽しい一時をすごしたものだった。記念写真に光が入り赤茶けたのもよい記念？であった。

ところで一年のクラスにはヤンチャな連中がそろっていた。何時だったか、一度思い出にクラスで何処かに遊びに行こうかとなって昇仙峡の仙峨滝の上から覚円峰の裏に出て敷島へ下る景色のよい道があるけれどなと話が出た時、いつもの連中が早速その週の土曜の放課後でかけて行ってきて「あんなところ、つまらんよ」とのたもうた。わずか半日であそこまで行って来ようとは、その健脚ぶりにあぜんとしたものだった。

では、二年の時はどうだったろう。四月の始業式直前、クラス大編成も担任の発表もない時、不覚にも盲腸炎で入院、心配していると式をすませて早々に新クラス代表



可以賛天地之化育

三組担任　加藤正明

一、昭和40年4月新学年始業式のあった週の土曜日のことでした。友人の内輪の結婚祝出席のため仲間と待ち合せをしました。その仲間と予定時間までの時間つぶしに撞球でもしてみるかと不案内な店に入った。階段をのぼって、うす暗い部屋に入り、おそるおそる進んでいった時、突然「先生、こんにちは」と声をかけられた。びっくりして見ると一人の青年がにこやかに微笑みながら「今度先生のクラスになった者です」と話しかけて来た。田舎の学校から転勤した教員の頭の中で、いろいろなことが思いめぐっていた。職員旅行の際ホテルでたまたま玉撞きをやってみたことしかないのに高校生が撞球場に常連のような顔をしていた。三年生正担の駒井憲久先生が5月からハワイに留学予定のため、同じ英語担当の私が副担としてお手伝することで始業式後のHRで一度だけ挨拶した生徒が気軽るに話しかけてくれたこと、まさに「ああそう」と返事をするのが精一杯であった。一高生の生活範囲の広さのびやかさ、そして人とのつきあいのおおらかさを知った。

二、最初の授業、英語科職員室で「生徒に実力を試されるから心してゆけよ」と励まされ教室に向った。「しっかりと授業をして、生徒の質問にきちんと対応できないと、実力のない教員といわれるからな」これでした。たしかにありました。授業が終ったとたん、何人かの生徒にとり囲まれ、授業の範囲にはほんの少しでもかかわる事項に席にいた色白で愛らしいOさんが結ばれ素晴らしい家庭をつくっているけれど。皆で幸せを祈ってあげよう（イギリスからの便りに返事を忘れてごめん。怒らずに近況を知らせてほしい）

ところで我がクラスはいずれもピカ一であったと思う。勉強の話はあまり出なかったけれど三年のM君が言っていた「勉強大変だろう。毎晩十二時位まではやっている？」「それでは間に合いません。一時や二時は当り前です。それでもどうかな」と首をひねっていた。とにかく皆悔いなく頑張った。それぞれ目的を達成して巣立って行った。何時までも制服姿の諸君しか浮かんで来ない。皆が笑いながら話しかけて来る。兄弟妹のように過ごした年月が懐しい。思えば幸せな日々であった。諸君がたとえ何才になり何処にいようとも一緒に勉強した私の大事な生徒である。

負けるなよ。大きい夢をもって二十一世紀に向けて前進していってくれ。心から応援している。

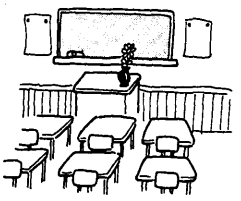
ついて、いくつかの質問をあびせてきました。なんだか漱石の『坊ちゃん』のシーンを思いうかべていました。かろうじてクリアし、ほっとした思いで帰りの廊下の窓から空を見上げた。

三、「要諦」　主体性とか自立の基本をなす物を考える力は、経験とそれを認識し表現するに言葉を必要とします。その言葉をどれほど修得し、使えるかが思案の根底にある。春の生徒総会の折、生徒会長の「……の要諦は……」という発言は、その話の内容、語彙の豊富さとに支えられ、インパクトと説得力にあふれていた。又ひきつづく議論にあっても、一人の生徒が15分間も広汎な意見を陳述するのをきくと、生徒達の自分の言葉で意見を述べようとする意欲・能力・関心の高さにさすが一高生という思いがして感心させられた。

四、あるクラスの会計係が集金の時、自分の机の上にバケツをおいて、「金を持ってきた者はこの中に入れておけ」と云って、名簿に記録することもせず無事仕事が仕上っていた。クラブ活動でも「自分達でしますから、先生顔を出さなくてもいいですよ」というクラブが多かった。体育局のように監督、コーチの指導が必要な場合は顧問の先生のお力を要請もし又自分達がコーチ指導者をさがしてお願いしていた。学習面でも学校・教師に頼ることなく自分で手段方法をさがし、努力しているところが大きかった。3時20分の放課と同時に学校から生徒はほとんどいなくなっていた。田舎の高校から転勤した私など少々さびしかったが、全県一区で通学に要する時間等考えると無理からぬ面もあった。それ故時に話しかけてくる生徒との会話が大学生仲間を思い出す楽しさも与えてくれ学生時代にかえったような気もした。授業をきちんと進めていればよかった、のどかさのある良き学園生活を味あわせてもらった。

五、当時の一高は生徒も素晴らしかったが、職員先生方も立派な方が多く、たいへん啓発された。学習指導はもとより、多方面にわたる様々な経験と業績に高校の先生方にもこんな活躍をされているとおどろきも多かった。又個人的には日新ホールのマスターであった丸山さんには思い出を沢山いただきました。ご指導、お力添えをうけるほか、楽しい勤務生活ができたのも丸山さんのおかげであると感謝いたしております。残念なことに平成九年一月に亡くなられております。その姿は卒業生の皆様の一高時代の思い出のどこかに残っておることでしょう。

六、山梨を守り又山梨を代表する人材を多く輩出してきた学校に、しかも秀れた資質とおおらかな人柄の生徒諸君の中で十年間勤務できたことは、私の一生の宝でございます。振り返って38年の教員生活を思うとき、我が身のいたらなさを恥じるとともに、若い人の伸びる力の大きさに感動するばかりです。学校の教員のなしうることはわずかであるが、子供達自らの力で成長する時少しの手助けができることが、その務めであるのでしょう。甲府一高の校是「可以賛天地之化育」こそ「教育の要諦」ならんとの思い深くするこの頃です。



恩師健在
とっておきの一言



「絆」によせて

四組担任　沢登　眞

「絆」という言葉は辞書をみると「馬犬鷹などをつなぎとめる綱。転じて断とうにも断ち切れない人の結びつき」と書かれています。よく考えてみると私達の日常生活は内には親子・夫婦等の「家族の絆」、外には同窓や子弟の絆やその他の絆によって成り立っていることの多いのに気がつきます。

そこで最初に私と甲一昭和四十一年卒の皆さんとの「絆」についてふれたいと思います。今を去る三十有余年前、私は皆さんの入学と同時に甲二より転任しました。女子校より男子校への異動で最初は戸惑いました。しかし母校への赴任で後輩の指導という誇りと、一クラス五十五名で十二クラスの怒濤のような生徒の熱意とやる気に励まされ、皆さんと一緒に三年間努力してきました。このことは当時の学年主任保坂忠信先生の発案による学年誌「あしおと」の自分の記事をみて、我れながらうなづくことができました。この「あしおと」は一年から三年まで発行され、大部分の生徒が投稿し、甲一時代の心の変遷がすなおに表現されています。とくに大学受験という重圧にもめげず、広い視野からの記事が多いのには感心しました。

さて私が教職を去った昭和六十一年には旧三年四組の皆さんが退職祝いの会を催してくれ、妻と二人分の旅行券で北海道旅行をさせて戴いたことは今でも心にのこる絆のありがたさです。更にこの組の人の経営している予備校に講師として招かれ、約十年間そこでの教科指導にあたり、現在も副校長として教え子と一緒に受験生の面倒をみています。

もう一つこの組の二人の結婚の媒妁を依頼され、今でもこの二人とは家族ぐるみの交際をしています。そのお子さんがすでに大学を卒業、就職しているのをみるにつけ月日のたつのは早いものだとつくづく感じ幸あれと祈る気持ちで一杯です。以上「子弟の絆」についてふれましたが、寧ろ今では教え子より学ぶ点の多いことに心強さを感じています。

次に私と「甲一との絆」についてふれてみます。私は甲中昭和十八年卒の同窓ですが、終戦後より「一八会」という無尽会がつくられ、今でも三十有余名が参加して盛会です。同窓の二軒のレストランを会場に夫々の持味を生かしてのスピーチ等「同窓の絆」を生かしての生涯学習の場となっています。

別に鶴城楕形会の名称のもと、私の住んでいる楠形町在住の甲中・甲一の卒業生一二〇名が年一回集まり、懇親会を催しています。年配の卒業生は手近かなところで「同窓の絆」が確認でき、毎年の総会を楽しみにされています。

おそらくこれら二種類の会は卒業学年毎又県内各地に沢山つくられており「同窓の絆」がより強固なものになっていくものと思われます。

以上子弟や同窓の「絆」について記してみましたが、私が母校甲一の教師になったことが縁で、それらの「絆」によって、私の人生がより充実し、しかもより有意義なものになったことに心から感謝しています。

どうか皆さんもこの「同窓の絆」を末ながく大切にして欲しいと思います。

恩師健在
とっておきの一言



懐かしの車通勤

五組担任
秋山美彦

私と車との関りは半世紀以上も前に遡る。終戦直前の夏、神奈川県座間の相武台上でのことである。ガソリン節約のため数人の仲間がトラックを牽引し、一人がその運転台で操縦訓練をした。文字通り「人力車」訓練をした士官候補生時代が私の自動車教習の嚆矢である。

その後「雨の日は乗らない。後でグリースアップが必要だから」「ギヤチェンジが煩わしい」とか「ガソリンがリッター五十円にもなったら徒歩通勤だ」など、今の若い人達には分かり難い会話が交わされたのも今は昔話になってしまった。

穴切神社界隈を走行中、突然狭い横道から子供の乗った自転車が突っ走って来た。急停車し事無きを得たがボディーは少なからず傷ついた。「あれだけ注意したのに又やってしまって。でも一高の先生の車でよかった」とはその子の母親の弁。弁償の話どころか今後は十分注意するようにと親子に告げるのがやっとで、そそくさとその場を走り去った。

「お願い、速く」血相変えて、日頃は冷静な養護教諭のK先生が意味不明な言葉と同時に駆け込んできた。甲府一高のある日、午前の授業が終った直後、私が昼食を取ろうとした時の英語科職員室のことであった。要約すると、一人の生徒が先を争って校内食堂に入る際、入口の階段に躓いて、大きなガラス戸に首を突っ込んでしまったのだった。その生徒は大した傷ではないと思い自分の手で首を押さえながら止血のため、保健室に行った。後で聞いた話であるが、その傷を一目見たK先生は、余りの重症に一瞬呆然として、なす術も思い浮かばなかったという。

ところが流石ベテラン養教、この生徒を一刻も速く病院へ搬送するのには救急車よりも、そうだ、すぐ目の前にある秋山の車だと迷?案が浮かんだのだという。今から三十年以上も前の話。当時は車の数も少なく、況して車で通勤する教師など殆んどいなかった。校内でも駐車は講堂や職員室前図書館横など、大体どこでも自由に可能なよき時代であった。

閑話休題。そこでK先生の頼みに応え私は昼食どころか、取るものも取り敢えずこの生徒をK先生介護のもと、小宮山外科病院まで搬送したのだった。案の状、傷は深かったが、運よく頸動脈を僅かに外れていたので一命を取り留めたのだという。

兎に角、昼食時のHRがあるので倉皇として帰校した。病院を出る時、急を知って駈けつけたと思われる見舞いの人々が忙しく動いていたのを今も覚えている。

実はこの時の私の車は乗り始めて間もない新車。安月給の身で、三食を二食に切り詰めるような倹しい生活をして購入し、毎朝夕舐めるように手入れをし(現在は一年に一度洗車するかどうかだが)他人は乗せたくない、家族にさえ靴底の土は払って乗れというなど、新車への思い入れはまさに狂気の沙汰であった。その秋山がよくぞ血塗れの生徒を……。

「自慢か」と揶揄する向きもあろうが、これが救急車代行の初回であった。この時のK先生も、もう何年も前に他界された。

私は昭和四十一年(一九六六)卒業の同窓生には、三年間お付き合いがあった。取り分け三年次の五組は卒業学年の担任として当然のことながら思い出も多い。この年甲府一高から五名が東京工大に合格、うち四名が五組の生徒、残りの一名Y君も一年



思い出の甲府一高

六組担任　渡辺　弘

私が甲府一高で勤務したのは昭和三十五年（一九六〇）四月から、昭和四十三年（一九六八）の三月まで。その年の四月からは甲府一高と甲府南高との間での総合選抜制度が発足して、私は南高に転勤させられた。「させられた」と言うのは、全く突然に、当時の校長であった高遠先生に呼ばれ、そのことを告げられたからである。甲府一高を私は好きだった。もっと長く勤めていたいと思っていた。意志に反して何故？そう思った。今にして思えばわがまま勝手、自分中心で、県教育委員会の意とするところなど全く理解していなかった。三十二歳から四十歳までの若い盛り、心身ともに最も充実していた時代を、毎日夢中で精いっぱいに過した。楽しかった。教えるということは、そのまま学ぶこと、生徒たちを弟と思い、仲間と思って一緒に考え、苦しみ、喜怒哀楽が共有できて、ピチピチしながら過した日々であった。

あれから三十数年を経て思い出せば、いわゆる若気の至りの年頃で内心に忸怩たるものがある。間違ったこと、思慮の浅さも意に介せず「教師」であったことを申しわけなくも思うのだが、一方では若かったからこそつくり得た人間関係や「教育」も成立していたのかもしれないと思う。

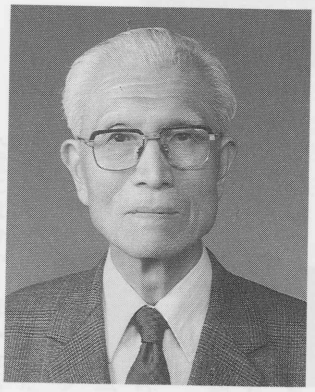
忘れられないことはいっぱいある。その二、三を拾って書いてみよう。

あの頃の甲府一高の生徒総会は簡単には済まなかった。二日に及ぶこともしばしば。甲論乙駁、実に活発でそれを楽しんでいるようにも見えた。驚ろいたことは、小兵で腕力などは全くなさそうな生徒も元気よく颯爽と立って前に出、堂々と発言したことである。その意見が特定の個人や、あるクラブ活動をしている者にとって不利、不快なことであっても理非曲直を明らかにして恐れることはなかった。当時の甲府一高には自由闊達な気風があり、寛容なところがあった。

いている。その上、還暦祝や三十回皆勤賞まで頂戴した。

二次会の飲み屋では、「俺は成績の悪い留年組だ」で通してきたが、しかし今年あたりは流石にそのギャグも通用しなくなってしまった。ひと昔前には生徒たちの中から「頭だけ見ると、どっちが先生だか判らんぞ」などと冗談を飛ばす者もいたが、その五組の中からもすでに四人の教え子が点鬼簿に記されてしまった。昔撮ったこの会の写真で、満面に笑みをたたえた故人を目にするたびに老いの目頭は熱くなる。心からなる冥福を祈らずにはおられない。

終わりに、名門甲府一高の益々の発展と同窓生の皆様の御活躍、御多幸を祈念して擱筆します。



思い出すことごと

七組担任　矢崎　豊

私は前任校で三年間担任した生徒達を送り出し、四月からは新入学生を責任者として指導するようにと校長より命ぜられ、その準備に取り掛っていたところ甲府一高への転任の内示をうけ、想像もしておらないことで、いささか驚きましたが、母校の教師として赴任することは大いなる喜びでもありました。

しかし正直のところ、一流大学に進学を希望する生徒が大勢いるような学校で、教師として勤まるかどうかという不安の方がまさっていました。

子供の頃から勉強嫌いで、特に理数系には弱かったのが、どこでどう間違ったのか化学を専攻する羽目になり、戦地（インドネシア）から悪運強く生還し恩師のお世話で教師（当時の所謂デモ・シカ先生）となりました。そんなわけで学力もなく、長い間勉強もしなかった私にとって残された方法は、指導力をつけることでしたので、生まれてはじめて一生懸命勉強はしたのですが、如何んせん生来頭が悪いのですから、とても満足してもらえるような授業はできなかったと思いますが、これをカバーしてくれたのは生徒諸君の頑張りと先生方の援助でした。そんな状態でなんとか三年間を過ごし、卒業式を迎えられ、ホッとした気持ちになったことを今でもはっきりと覚えております。

その後転出するまでに色々のことがありましたが、特に強く記憶に残っていることは、学園紛争の嵐が大学から高校にまで波及し、山梨県では一高がその中心となり、多くの生徒がそれに共鳴して活発に活動したことでした。

今では高校生が制帽をかぶらないのが普通になっていて、かぶった生徒が異常に見えるようになった。当時は制服・制帽の義務はきびしく、高校生になって徽章のついた帽子をかぶることに誇りさえもっていた生徒も多かった。

昭和三十年代の後半になって、高校生に着帽の義務を課すことの是非が議論され、甲府一高の職員会議では真剣な討論が行われた。その頃すでにイガグリ頭の生徒はほとんどいなくなっていた。実状に合わないのではないか、外から規制して高校生の自覚を持たせるのではなく、内からそれを芽生えさせることが大切だ、そんな議論が交わされた。甲府一高なればこそ県下に先んじてそれが話題になったものと思う。

強行遠足にまつわる思い出は多い。昭和三十七年（一九六二）の第三十六回大会からは従来の松本コースから海ノ口コースへと変更になったが、強行遠足は「人間であること」を「人の情」を考えさせた。強行遠足を経験したことが甲府一高生であったことでもあった。星空の下を孤独に耐えて歩き、夜明けの町や村の表情を感じ、笑顔で応援してくれた沿道の人との情に泣き家庭のぬくもり、人間の絆の強さありがたさを感じたのである。それは生徒たちも先生たちもであった。

私にとっても甲府一高は今も青春の泉のあふれるところである。



希望の光

八組担任　保坂知己

第百十八回同窓会総会の開催に当り、昭和四十一年度の卒業生が当番幹事になりました。依田委員長をはじめ、委員を中心にした皆さんの長い間の熱心な取り組みについて深く感謝いたします。

アルバムを見ながら当時を断片的に思い出してみる。戦後最大の急増期と言われ、十二クラス、六百五十余名の俊英の集りでした。一番北側の木造校舎で、バレー・テニスコートに接していて、夏の暑さには閉口しました。自由な空気が横溢していきましたが進学指導については最も力を注いだことでした。

教師の立場としては彼等の将来を考え、あまり無茶なことをやって学校におれないような事態にならぬよう悩んだことでした。

また、仲良くなった二人が心中をはかり、一人が死亡したことでした。生き残った生徒はその後どのような人生をおくっているのか、友達の人生を終らせたことについてどのように考えているのか、気に掛かることでした。

今日この頃の世相をみると、前述のような純粋な気持ちからの行動と思えるものの一面のみを、利己的な行動に置き換えているように思えてなりません。

すでに人生の終りに近づいた私にとっては、皆さんが家庭や社会でよき指導者であることを願って止みません。

点でした。校内外の模試がかなり頻繁に行われた記録がある。東北大学への出願、激励のために、雪の仙台へ行ったものである。全体の進路結果の好成績と共に印象深い。アルバムのいたる所に出ている旧校舎は一高の歴史の貴重な資料になるでしょう。

創立八十五周年が昭和四十年で、この学年が三年生でした。現在校舎の真正面に移されている大島正健先生彰徳碑が建立されました。「青年奮起して功名を立てよ。馬上の遺言熱誠籠る…」所は石狩の原野、札幌農学校のクラーク先生が弟子たちに与えた訣別の遺訓に対して、その折の感情を即吟した漢詩である。レリーフと湛山書になる遺訓が刻まれている。明治十年四月の情景が語り継がれて、一高に深く根をおろしている。日本の英学の事始めとしても歴史に残っている。この遺訓が後世に及ぼした大きい影響については多言を要すまい。彰徳記念誌の発刊もあって、改めてこの学年と結びつけて心に留めておきたい。

この他に強行遠足の沿革誌が刊行され、表紙はなつかしい出発風景である。「顧みて、さらに新たなる気概を!」を今年度のテーマにしている。記念誌部会長の赤池幸久君は、このテーマの秘める決意として、「次の世代への責任を果たし、二十一世紀に向けて新たなる気概をもってのぞみ、平和で安定した社会を構築する」と述べています。

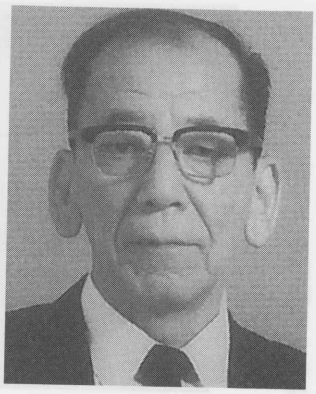
現在の日本のあらゆる面の閉塞状態と社会生活の基盤が正に崩れんとする事態についての憂慮から発したものである。世界の

大勢に身を任せて漂流しているとか、理想なき国家など悲嘆の意見をよく見聞きする。「歴史の教える教訓の中で最も重要なものは、人は歴史の教訓からあまり多くのものを学べないものである」という戒めの名言を思い起こしました。

今、日本の諸方面の第一線で活躍している世代の意識として、このテーマはまことに時宜にかなうものと思う。この主張が現実のものとなって、理想ある社会を次の世代に贈るよう期待するのみである。

記念事業にユニセフへの寄付があります。この文を書いている時に冬のオリンピックが開かれています。同時にこの地球上に悲惨な状況にある多くの子供たちがいるのが現実の姿です。この救援資金としての寄付の意義を痛感し、この着眼に敬意を表します。

「希望の光身に浴びて…」の応援歌に意気高揚した頃を思い出します。その一節にある蛟竜は雲を得て天に登る。機を取らえて大業を成し遂げるの謂という。母校一高の発展と卒業生の一層のご活躍とご多幸をお祈りします。



思い出はるか
若き獅子たち

九組担任
八田政季

わたくしが一高に在職していたころの卒業生達が総会の当番学年に当っておられるからでしょうか、ここ数年連続して記念誌に登場あるいは投稿させて戴き恐縮しております。

長いようで短かかった教師生活を大過小過とりまぜながら終え、今はわずかな畑や庭先で草木や野菜作りを楽しんでいます。「もはや戦後ではない」と言われ始めた一九五〇年代の中頃から、すさまじいまでの「バブル崩壊」の世紀末に至る四十年の歳月の中で、わたくしにとって最も波乱に富み、豊饒な充実感を味わったのは、三十歳代後半までの約十年間の、一高での日々でした。

高名な斉藤俊章、廣瀬勝雄、高遠啓一の三人の校長の下で、一高は昼となく夜となく、そして日曜日もなく動いていました。というのは定時制も通信制も併置されていたからです。同じ教室を昼・夜別に使う全日・定時制の生徒の間で交流ノートがつくられたこともありました。

よきにつけ、あしきにつけ一高は、名門伝統を背負いながら荒野を駆ける「若き獅子」の如くに、ある何ものかに対して挑戦的だったように思います。―生徒も教師も―。生徒や保護者の目にどのように映っていたかはさておき、強烈な個性を傲然とかかげる先生方が数多くおられました。鬼籍に入られているので実名をお許しいただくとして、漢文の笠井南邨先生、体育の野口竹次郎先生、美術の須藤獏先生、三枝茂雄先生、商業というより野球の長田詮先生等々、それぞれの分野で名を成しておられる自信に裏打ちされた鮮烈な個性に接し、生徒以上にわたくしは強いカルチュア・ショックを受けていました。

勿論ご健勝でご活躍の先生方の学識や生きざまに学ぶことも多い毎日でした。丁度スプートニクが打ち上げられた翌日、わたくしはS・O先生の地学の授業を生徒にま

恩師健在
とっておきの一言



述懐

十組担任　**功刀幸丸**

九年勤めた甲府一高を離れてから、二十五年になる。私には教職現役中が、今考えると一番充実していた時期と思える。甲府一高は進学校であるとよく言う、広瀬校長の旗振り、よろしきを得て一生懸命に生徒と共に頑張った思い出が懐かしく、又、楽しく甦える。私がホームルーム担任をした最後の学年であり、生徒もよく勉強し、授業も楽しかった。この学年を送り出して、次の年には進路主任となり、進路状況の統計をとった一人である。この学年ほど進学校としての面目を発揮した学年は甲府一高の戦後では無いと、今でも思っている。この学年も当時、英語はA・B・C、数学はP・Q・Rの三段階の習熟度別授業で私は数学を教えていた。一、二年の頃にはRからPへと二段階飛び級の人が結構いた。

どんな職業人の仕事にも功罪がある、教員としても例外ではない。その功罪の現われ方は他の職業に比べ、それほど明確ではない。スポーツの場合などは、瞬時にしてその成果は現れる。ところが教員の場合、教育活動の功過は何によって判定したらよいのだろうか、教育の成果を判定する客観的基準はないように思われる。学力といっても、多分に相対的なもので点数など便宜的な尺度に過ぎない。まして人間性の陶冶ともなれば全く明確に測定不可能な営みである。学力に限っても、教師の功だけに帰せられるものではない、何よりも生徒の努力の結果だからである。進路達成への目的意識の自覚と、努力の出来る環境作りは大切な事と思われる。学校全体の場合を考えじって受けていました。今は峡南の山村の名を全国区にした名村長T君、一高で教鞭をとっておられるO先生等と机を接していたのです。―そんなことがサラッと許された学校が一高でした。

生徒の活動も多彩・ユニークで、甲子園に二度の出場を果した野球部のほか陸上・水泳・バレー・バスケ等常に県下をリードしていました。わたくしは数年間卓球部にかかわって、何回か関東大会、全国大会を経験することができました。本年が高体連創立五十周年に当るというので、先般表彰状をいただいてしまいました。

今は絶えてしまった学校新聞コンクールでの優勝、他校にさきがけてのブラスバンド発表会も忘れられない思い出ですが、活動資金を捻出するため、小野同窓会長（当時）のご協力を得て、映画「ベンハー」のチケットを生徒会役員と売りまくった中銀横の寒風を懐しんでいます。

本年の当番学年は史上最高の進学結果を出したいわゆる「花の四十一年組」（大蔵省ではない！）として語り草ですが、とかく教師は、生徒達の挙げた成果を自らの功であるかのように錯覚するかわいい習性をもつ人種です。自戒せねばと思いながら、わたくしもその性から抜け出すことのできないまま齢を重ねてしまいました。

一高在職中、最も心に残ったのは、矢内原忠雄東大総長の講演を生徒とともに聞くことができた日です。東大生数人の富士山遭難間もなくの講演の結びは「若人の魂は白雪よりも白し」でした。

ると進学校という名前が通用する当時の風潮に乗って、有名大学への合格者を多く出す高校が一流校視されていた。

その頃の話であるが、ある会合の席に入ってきた某校の先生が、こう言った「今年は国公立大学に何十人入れた」と、「入ってくれた」のならともかく、「入れた」とは何んという思い上がりだろうと非難する人もいた。学校の熱意、教員の努力は認められるが、この自惚は誠に厚かましい。教育者らしい慎みを欠いた言辞は何んとも言えぬ白々しさを感じた事を思い出す。

丁度その頃、前任高校在職時代に教えた、ある学年の会があった。今でいう習熟度別学級編成で私が一番進んだ組の担任であった。その会に出席した別のクラスの一人が、こう言った「あの当時よく出来る先生の組の諸君がいて、ぼくたちは近づけなかった」と。その言葉に悪意は、毛頭なく、たゞ昔を振り返り、自分の不勉強を恥じながら正直に語ってくれたのであった。私はそれを聞いて心が痛んだ。今でも思い出す度に痛みを感ずる。自分では公平にやっている心算でも、一部の生徒からそういう眼で見られていたのであったか、そうした自分の姿勢は生徒のみならず他校の職員にも前記の某先生同様鼻持ちならぬ傲慢と受けとられていたかも知れない。私自身よく「入ってくれた」喜びの反面、若気の至りで、勇み足ではなかったかとその頃を思い、未だに痛恨事としているのである。

だが一方で思い出に残る生徒もいる。解析概論という数学の大学の理数系の教科書を趣味で読んでいる生徒がいて、その中の一部を質問された。家へ帰って、その本の質問の前後を勉強しなおして答えた事もあった。その生徒は東大の修士を出て、宗教学を専攻し、今、私立大学の教授をしている。文科系だが数学に強く、著書に「雪片曲線論」等、多数あり、大学生より、大変人気を得ていると聞く、一時期母校の東大から教授にという話もあったが中央公論などに載せた人間味豊かな?、散文が生命取りになり、実力があり乍教授の一部に反対があり駄目になったと、学友の送ってくれた週刊誌のコピーを読んだ。この著書は私も買って、今も本棚で眠っている。

又、中央線で一緒に通勤していた、今は亡き本校の社会科の某先生は、酒をこよなく愛し中央線乗越しの記録保持者だと御自分で言われておった。この先生の親類で先生が自慢する優秀な兄弟がいた。芦安村の山奥から出て来て習熟度別のクラス授業の二段階飛び級の一人であった。今は東大と、筑波大の教授となって居る、教室での眼の輝きを思い出す。

私が本校で数学を教えた頃、生徒の優秀なのがZ会という通信添削をしており、その中の疑問を持って質問に来た。私にもその場で解けず、家に持ち帰り数日考えた事があった、このZ会は東大の現役学生をアルバイトで雇い数学問題集や、参考書も出していた。特に東京の駿台予備校の数学の先生で三Nと呼ばれた、根岸、中田、野沢の有名先生が東大在学中に創設された会でレベルの高さと、難問で定評があった。後に甲府一高でも夏期講習で、この先生方をお呼びしたので知っている生徒も居ると思う、私は進路の係をしていて個人的にもお付き合いがあった。Z会の質問は解いた問題も通信添削なので生徒が出すと点になって返って来るので油断が出来なかった。

この様な数学は一部の生徒のみに必要なもので、たまにPクラスでやって見る程度で、一般的でない、習熟度別授業で生かされる程度であった。

それにしても、私は甲府一高のような所謂進学校に止まらず、晩年、校長として、甲府昭和高校の創立に係った時、甲府一高に勤務したことが生かされ、望外の喜びとしている。尚、この学年の三人が高校教員となっていて学校づくりに直接教鞭をとって参画してくれた。

私にとって、力強い限りであった。

「棺を蓋いで事定まる」という言葉があるが、教育者の功過はその時点でも定まらないであろう。よかれ悪しかれ教育の成果は、その生徒に、そしてまた次の世代へと伝わるからである。この学年の諸君も五十才で社会的にも責任の重い時期だが、二十一世紀を先導すべく尚一層の奮起を期待している。

一高の益々のご発展とご繁栄を心からお祈りする。



あの頃の思い出

十一組担任　根岸　昭

皆さんの卒業から三十二年、今年は同窓会総会の幹事学年という、五十歳の節目の年を迎え、準備に大変だったことと推察いたします。

記念誌に何か寄稿するようにとの連絡を頂きましたが、さて何を書いてよいやら当惑してしまいました。

私は、昭和三十年四月から四十二年三月までの十二年間、甲府一高に勤め、十一年間学級担任を致しました。

皆さんの四十一年卒業学年は、十二クラスで一クラス五十四・五人という、一高で生徒数の最も多い時代だったと思います。

私はたまたま、一年、二年、三年と十一組の担任でしたので、特別の思いが致します。当時を顧みますと、野辺山遠足、身延山宿泊研修会、強行遠足、修学旅行、富士山遠足、学校創立八十五周年記念行事、東京オリンピック等々沢山の出来事が浮かんでまいります。

一高での思い出と言えば、やはり強行遠足ですが、強行遠足については同窓会総会記念誌に昨年も寄稿しましたので、皆さんの学年の最も特色ある三年間を通しての思い出は学年誌「あしおと」であります。

寄稿依頼を受けて、本当に久し振りに三年分の「あしおと」と「卒業アルバム」に目を通して、あれこれと当時を懐かしく思い出しました。

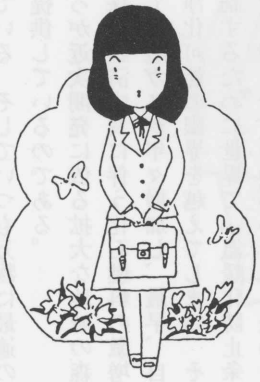
各号とも、希望に胸をふくらませて入学し、立派に成長し卒業をまじかに控えた三年間の学校生活での、希望や不安、進路選択の悩み、人生の探究、交友関係、諸行事についての感想などなどが個性的に表現されています。

そして、それらについての考え方や文章が年を追って充実しており、皆さんの成長のあしあとをはっきりと窺うことができます。

皆さんはいま、人生半ばを過ぎてそれぞれの分野で、指導的立場にたって活躍されている年齢です。

二十一世紀が指呼の間のいま、次世紀への橋渡しを立派に務められて、より希望に充ちた平和な二十一世紀を築くために、益々自愛され、活躍されんことを切望いたします。

終りに、甲府中学、甲府一高同窓会のご発展と、第百十八回総会のご盛会をお祈り申し上げます。





過ぎたるは危うし

十二組担任　寺田和男

炭焼きの　長き煙や　尾根を這う

晩秋から初冬にかけて、盆地をめぐる山々の中腹あたりから、細い白煙の立ち昇ってゆくのがよく見かけられた。これは、なら・くぬぎ・かしなどの木を、土を積んだかまどに詰め込み、四・五日蒸し焼きにして、炭を作っている時の煙で、当時の風物詩であった。

群青の空、紅葉した山腹から立ち昇る一本の白煙、やがて尾根の風に巻き込まれてゆく、その情景が一幅の絵のように蘇ってくる。

炭は薪と共に主たる燃料で、勝手元コンロから火鉢、炬燵などの熱源に用いられ、いつも「お荒神さん」（かまど神）が見守っているというので、必要最少限に節約し、丁寧に扱っていた。学校でも教室毎に一メートル四方もある大きな木枠で囲んだ鉄の火鉢があり、室内の暖房はもとより、冷えた弁当の加温にも役立っていた。冷え込む居間で、火鉢の炭火に手をかざして暖をとる様子は、今想像するだけでも何とも寒々しい光景だが、それでも温かく寒さを凌ぐことができたのは、すでに習慣として身に備っていたからであろう。

さて、戦後半世紀を迎えた今日、急速な経済成長に伴い、生活様式は一変し、熱源はより安全で便利な、電気、ガス、石油にとって代り、滅多に炭を見る機会すら無く辛うじて登山用品コーナーで目につく位で全く影をひそめてしまった。ところが一方物は豊富となり便利で快適な生活とは裏腹に、意外にも拡大な地球規模に亘る環境汚染が進行していたとは、一般に多くの人は気付いていなかったのである。

当時、新潟、九州の水俣病、富山のイタイイタイ病、四日市ぜんそくなど、すでに地域的に発生した汚染については公害として知らされていた。

時間と空間とが織りなす玄妙な自然界は水と空気とが循環する過程で浄化と還元を行い、多くの事象を完全無欠、過不足なく運行している。そしていつも万物に最適の環境を提供しているのである。

ところが近次開発に依る拡大な地域の森林の伐採、経済成長に伴う化石燃料の激増によって炭酸ガスが年々増加し、最早、自然界で浄化可能の限界を越えてしまい、それを抑制するために世界で「温暖化防止条例（九〇年のレベル六%減）」を取り決めなければならない事態となってきた。

その外、冷媒、工業的用途の広いフロンガスは、自然界を循環せず揮発上昇して、オゾン層（地球を強い紫外線から守る層）を破壊することが分かり「ヘルシンキ宣言（フロン全廃）」が採択されている。

更にゴミ焼却場、製紙工場が発生源とされている有毒なダイオキシンについては、発生、分布などの全容について、まだ十分に分かっていない。

人間の体は生物進化の過程で、ある程度の欠乏状態に耐えられるように組織、構成されている。その反面、飽満な状況では諸器官の機能する限界を越えて、その平衡が破れ、循環が効果的に働かず、次第に生活慣習性の異常に陥ってゆくものと思われる。

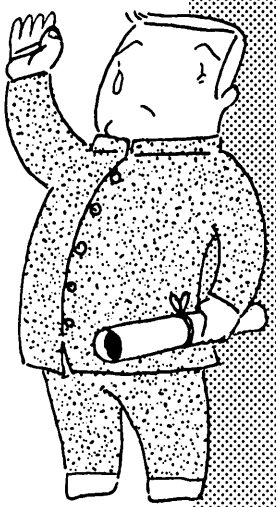
かつて、五穀、山菜生活であった長寿村落にも、欧米風の食文化が波及して、今迄に皆無と思われていた循環器系の疾患が発生し始めたとのことを聞いている。

果しなき大空を仰いで「無限」を連想していたこの拡大な地球の環境と、人間一人ひとりの小さな存在が共に、限度を越えた

恩師健在
とっておきの一言

事象に汚染され脅かされている。正に「過ぎたるは危うし」の今日である。二十一世紀を目前に控えて、炭焼の立ち昇る煙が見えた頃のような、美しい青い空を、環境を取り戻したいものである。

それには、全世界、全人類相呼応して、条約・宣言の遵守（行政）は勿論であるが一人ひとりが自然環境―海・山・川・そして住む町―を大切にいたわり、自然界の循環・浄化が途絶えることのないよう努力を重ねてゆかなければならない。



同窓生からのメッセージ

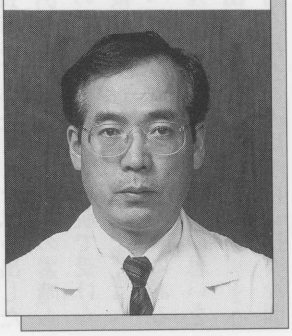
遥かなる青春の日々に
思いを馳せて、同窓生
からの珠玉の一文が…



同窓生からのメッセージ

開業して思うこと

田辺眼科医院　院長　田辺　譲二（昭和41年卒）



山梨県甲府市郊外にある中巨摩郡竜王町と金沢を鉄道で往復するとなると、乗り継ぎが多く所要時間も車に比べて長くかかり不便である。だから、学生時代と勤務医時代を金沢で過ごした私は、この30年間で、およそ100回は山梨と金沢を車で往復した。特にこの2、3年は故郷での開業ということもあって、かなり頻繁に往復した。おかげで私のオンボロ車は走行距離が軽く10万kmを越えた。

ただ、ルートがいくつかあって選択に迷うことが多い。まず夏は何といっても山々の景色が素晴らしいので松本経由で上高地～安房峠～平湯～神岡～富山～金沢のコースを走る。このルートは約300kmである。冬はスキー客が車で行くのだからと思いつつ松本を経由して豊科～白馬～糸魚川～富山を通り金沢に入る。このルートは約350km。

あるいは松本～長野～妙高～赤倉～上越～糸魚川～富山～金沢の場合もある。

このルートは約450kmである。

そして、少々高速道路代金がかさむが、諏訪～飯田～恵那山トンネル～小牧～岐阜～米原～敦賀～福井～金沢、このルートは約550km。先日も連休に、上高地経由で金沢までの往復をした。

皆さんもご存じかもしれませんが、今は安房トンネルの下にトンネルが掘られていて、上高地と安房峠の分岐点では片側一方通行で、やや長い信号待ちがあります。

先日、その場所で赤信号待ちをしていたとき、ふと運転席から窓越しに上の方を見ると、ツバメがスイーと川（梓川）の上を舞って私の車のほうに接近してきた。

漠然と眺めていると、車の上が洞門（半分トンネルのよう）になっていてツバメの巣がたくさんあった。よく観察すると、雨風や天敵（蛇など）を避けられるまことに都合の良い場所を選んで巣作りがしてあった。私は車から出て、しばらくツバメの巣を観察していたのだが、ふと、開業の準備を始めてから開業1年を迎えた今日までの出来事に共通するところがあるように思えてきた。

そこで、ツバメの巣作り、子育て、巣立ち、旅立ちなどと眼科医院開業とを比較対応してみたい。

(1) 巣作り場所……開業予定地選択、医師会、不動産業者

(2) 巣作り……設計士、建築業者、医療機器業者、保健所

(3) 子育て……受付、看護職員採用、教育、県庁、行政

(4) 巣立ち……開院式、来賓

(5) お礼、旅立ち……外来診療開始、手術業務

(6) 益鳥……視覚障害者機能回復、社会福祉貢献

ツバメは巣立ちのとき、巣を作った家の周りを1、2日御礼の意味を込めて旋回飛行をすると聞いたことがある。私も開業1年。お世話になったかたがたに早く御礼の旋回飛行をすべく、日常診療に励んでいる。

そして半年後…

安房トンネルが開通しました。約40年の歳月を費やして遂に完成した安房トンネルを私は様々な感慨を抱きつつ先日くぐりぬけました。アットいうまの5分間でしたが、様々な思いが脳裏を走りました。

『小雪舞う安房トンネルくぐりぬけ、奥飛騨の山々、雪輝く』

同窓生からのメッセージ

素敵な出会いから生まれる子供の未来

渡辺 憲子（昭和41年卒）



先日、何気なく観ていたテレビの番組で、高校卒業後間もない若者達に、高校生活についての意見を尋ねていました。彼らは一様に「高校はつまらなかった」とか、「ただ惰性で行っていただけ」などと言っていました。勿論、これがすべての意見と言うわけではないのですが、三年間の高校生活で「何も得なかったの？」と尋ねたい気持ちになりました。私は、普段は、個人的に中学生、高校生、浪人生と学習塾や予備校でかかわり合っていますが、こうした学習の場に来る子供達の多くは自分の意志で、より学力を上げたいとか、学校での学習内容をより確実にするため、大学合格をめざして、などといった何らかの目的意識を持って来るので、互いに喜びを共感する楽しさがあります。お互いの利害が一致しているからです。

しかし、ときどき中学校や、高校で教える機会をもったとき、学習の場にいながら、心はどこか他の宇宙空間にいるかのような風情で、無表情の生徒たちの存在に、ショックを受けたことがあります。

わかりやすく、生徒が興味を感じさらにその先に進みたくなるようにと、思いながら、教えているつもりなのに、心に届かない生徒がいる。まだ、私の創意工夫がたりないのだろうか、私の資質に問題があるのだろうかと悩んだりしました。

また、一人でも学習に参加しない生徒がいながら、授業を進めることが、どんなに疲れるものかを知り、現場の先生方のご苦労を、痛感しました。

また、彼らの中に高校時代の自分の姿を見たのもショックでした。

私も、田舎の中学校から、甲府一高の約六百人の仲間に入ったとき、大きなカルチャーショックを受け、自分が見えなくなり学習意欲を喪失していたことを思い出したのです。あのとき、一高で数多くの素晴らしい先生方のご指導を、折角、肌で受けられる機会に接しながら、ほとんど勉強せず、過ごした事への後悔がいつも心の隅にあるからでしょう。だからいつも、この思いを学生たちに伝えたいと思っています。

現在の教育を取りまく環境には様々な問題点があるようです。勿論私の場合同様に、単に本人の意識の問題というのもあるでしょうが、一つに、中学校と高校の学習内容の、質量両面での大きな格差というのもあげられるかと思います。生徒たちの側にそれに適応するだけの準備ができているかどうかという問題なのです。

百パーセント近い高校進学率という社会状況の中で、小中学校で学ぶ間に、学習習慣とか、自分なりの問題解決方法（学校の教科に限ったことばかりでなく）を身に付けていない生徒が、友達が行くからという理由で、何の目的もなく高校へ入学するといった事が少なからずあるのではないでしょうか。

こう考えるとき家庭教育の在り方、学校での教師の果たす役割がいかに大きいかが分かります。特に、小学校での教育の、影響は大きいと思います。俗にいう先生の当たりはずれという問題もあるでしょう。

また、何か事が起きると、学校と親の間で責任の所在について対立するといった構造はどうでしょうか。そうした状況の中では、子供は苦境に立たされてしまいます。

私も、二人の子供が、中学生のとき、より良い教育を受ける権利を守りたいという思いから学校と、対立した経験があるのでよくわかります。個々人の立場での先生方と、学校という組織の中での在り方にはかなりのずれがあるというジレンマの中で子供達は、かなり辛い思いをしました。しか

し、彼らがいろいろな場で尊敬できる方々とお会し、心を豊かにすることができ、社会的事件や、自殺といったことを起すこともなく、成長したことが幸いだと思うのです。

こうした事を振り返ってみるとき、子供達が成長する過程で最も重要なことの一つは素晴らしい人との出会いだと思えるのです。特に素晴らしい教師、指導者との出会いは、子供の人生を大きく変えるものだといえると思います。あまり勤勉ではありませんでしたが、私にとって甲府一高に学び優秀な先生方、友人と出会えたことは私の中に大きなインパクトを与えてくれました。

この多様化した社会の中で、子供達が学校に限らず習い事の場、学習塾の場、スポーツを通して多くの素晴らしい人、師、友人達と出会い、未来を思い描くことができ、後に続く人に良き遺産を残すような人達になれる事を私は願っています。

子供たちの未来のために、私達もそれぞれの立場で自分の出来る具体的な事で子供達の将来を照らしてやる必要があるでしょう。決してやりすぎることなく見守ってやることも出来ると思います。

私達、大人が親として、また一人の人間として自信と誇りを持って生きていることを一生懸命に伝えることも出来ると思います。

そうした意味で、今からも甲府一高が多くの素晴らしい出会いの場であり、優秀な人材を生み出す学校であり続けることを心から願っております。

同窓生からのメッセージ

「追憶」

千葉県庁勤務　井上　喜由（昭和41年卒）



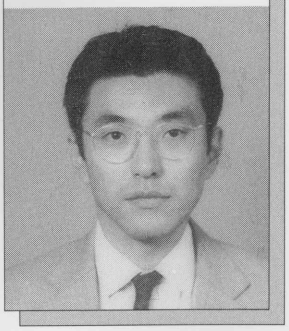
「甲府一高」……、何と響きのいい名前ではないだろうか、いい先生、いい友人、そして青春の胸を焦がした素敵なC子さん、K子さん。人生の最も多感な時を過ごした三年間。三十二年を経過したいまでも鮮烈な思いが焼きついている。今、自分の部屋には修学旅行で法隆寺の前で撮った集合写真が大きなパネルにして掲げてある、毎日眺める事ができる。いわゆる一つの自分の原点なのだ。五十年の生活の中でも際立っている。中学時代には劣等生だったがラッキーなことに、入学できた、しかし担任の先生は皆に暖かく平等のまなざしを向けてくれた、救われた思いだった。一年生は「亀」と言うあだ名のA先生、思いやりの溢れる先生だった。この時、園マリの歌や舟木一夫の「高校三年生」が街に流れていた様な気がする。従兄弟のM君と同じクラスになった、いい意味のライバル意識を持つ事ができた。同じクラスのS君は今、京都大学の教授、N君は東大を出て○○県警の本部長、彼等は順調にエリートコースに乗った。自分は落ちこぼれで前途は暗いと思っていたが、今思えばマアマアだと納得させる。

進学高校で灰色的な雰囲気もあったが、高くを望まなかった自分には明るい青春時代と言える部分もあった。高校二年、初めて男女共学を体験した。遠くから眺めているだけで心が安らぎ、生まれて来て良かったと感じさせてくれる、C子さんとK子さんがいた。朝、起きるのが、登校するのが楽しかった。こんな中で思い出の修学旅行があった、三年間の頂点だった、清水寺の舞台の上でC子さんと互いに写真を撮りあった。晴れの舞台だった。夜、K子さんと旅館を抜け出し市街に出た、数人で。……何で自分は今、他の女性を妻としているのだろう。この頃、確か吉永小百合の映画「愛と死を見つめて」が上映されていた、感動に涙した。又、天才の四人の男「ビートルズ」が活躍した、彼らはバッハやベートーベンを超えていると思った。このレコードは今、山梨県職員のA君に貸して戴いた。A君とは今でも親交がある。体育は苦手だったが強行遠足で自分にムチ打ち、松原湖まで歩いた、松原湖と言う名前が好きだったからである。二年、三年は同じ担任のH先生であった、人情家であった。「そうか、そうか、井上君、結局、自分の選んだ道を歩きなさい」と、私の立場に立って指導して下さった。授業ではしきりに「ペンペン草とかスッタモンダ……」と言われたのが記憶にある。英語のK先生には、この参考書をやれば大学に受かると言われ、その通りにやって、そうなった。昭和四十八年、千葉県職員になって赴任すると、周りの人が「甲府一高」の井上君と呼ぶ、外に出て初めて自分が「甲府一高」を出たことに誇りを持てるのだと実感した。その名を汚さぬ様、後輩の励みになる様に、残る十数年の公務員生活を過ごしたい、「甲府一高」時代の思いを暖めながら……。

同窓生からのメッセージ

甲府一高雑感　～当時を振り返って

井上税務会計事務所　井上　文人
（昭和58年卒）



3月某日、同窓会副担当幹事を代表する山本淳仁さんから「甲府一高を振り返って何か書いてもらえないか」という電話を頂き、この文章を書き始めています。

今この文章を目にされている方は、もちろん甲府一高を卒業された方だと思います。読まれている皆さんなら、同じテーマを与えられた時どんな事を書かれるのでしょうか。きっと皆さんそれぞれ色々な場面をお持ちの事と思います。

一高時代の3年間は、入学式に始まり、応援練習、球技大会、強行遠足、学園祭、部活動と続き、卒業という時を迎えるまで、本当に沢山の場面がありました。中には授業を抜け出して遊びに行った事や、先生方と口論をした事を思い出される方もいらっしゃるかもしれません。特に思い出す事は、そんな場面の中の、ほんの一瞬の出来事だったりもするでしょう。そんな場面を少しだけ書かせて頂きたいと思います。

●学園祭～最終日ファイヤストーム

現在はどうなっているか分かりませんが、在学当時、ファイヤストームの点火は弓道部の役目でした。学園祭中の記憶はそれほど残っていませんが、この点火の事は覚えています。1年生の時の学園祭最終日、夕闇があたりを染める頃グラウンドの中央に大きなファイヤストームのやぐらが組まれていました。そして、徐々に生徒や先生方がグラウンドに集まりその輪が大きくなった時、旧校舎のグラウンド正面にあった部室等の上に弓を携えた男子生徒が一人現れました。

歓声の中、袴姿の彼は矢の先に火を付け、そしてやぐらに向って放ちました。夕闇の中を飛ぶ矢を見た時、闇を照らす炎への原始的な感動とでも言うのでしょうか、何とも言えない気持ちでした。

巷に多い「矢は危ない」という理由だけで禁止してしまう〝思考の停止した人達〟と〝何年もその事を当然の事として受入れている人〟との違いも感じました。

それは一高が一高たる理由の一つだったのでしょう。

●生徒会長吉村幸一さん

これも当時よく言われた事ですが、甲府一高は非常に行事の多いお祭り好きな校風を持つ学校でした。そしてそれが甲府一高の持つ大らかさに通じていたと今でも思っています。記憶が正しければ、年間行事の半分以上を（名目だけでなく）生徒自治会の主催或いは企画によって行なっていたと思います。

その事で高校という組織として「考え実行する生徒達」と「心配しながら黙っている先生方」とのバランスがとれて良かったのかもしれません。

ちょうど高校2年生になろうという年、原動機付自転車等のバイク免許取得禁止運動という波が一高にもやってきました。理由は「危険だ」とか「非行」とかそんな所だったでしょう。興味深かったのは、この波が当時の総合選抜4校の中で最後に来た事です。記憶が正しければ、他の3校はすんなり（実際すんなり受入れたかは知りませんが…）生徒側がそれを受入れた事になっていました。そんな年の生徒会役員選挙に「バイク禁止反対」を公約とした吉村幸一さんが当選しました。そして公約通り生徒総会の議題にしています。生徒総会では議論の後に賛成多数で「バイク禁止反対」が可決されたと記憶しています。

客観的に見て、管理教育というものが徹底されている高校だとこの程度の議決は大抵ただの紙切れになり何の効果も無いでしょうし、そもそも生徒総会の議題

にする事についても問題とされたでしょう。結果として禁止にはなりましたが、この議決により他の3校とは違い、少なくとも全面禁止にはなりませんでした（保護者の同意の元に認めるというのが妥協点だった気がします。）

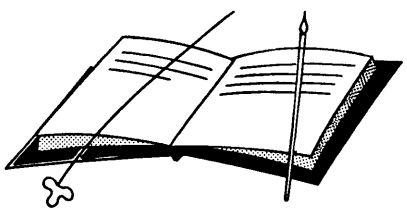
この事に、あの当時生徒会担当だった古屋（通称タンク）先生を中心とした先生方が〝聞く耳〟と生徒の考え方への〝想像力〟を持っていた事を感じます。

これも一高の一面であったと思います。

今の一高がどうなのかは全く知りません。昔はこうだったから今もこうしろというような精神論的な事を言うつもりも毛頭ありません。世の中が変わっていくように、その中で一高だけが変わらないなどという事も無いでしょう。

今回の〝依頼〟によって改めて振り返ってみると、私にとって、あの3年間は良い時間でした。

在学している人達が、友人とそんな時を共有し「学校」を感じてくれているとすれば、一種のノスタルジーですが、まだ甲府一高も存在しているのだなと思います。



第118回同窓会総会寄付者ご芳名

昭和41年卒業生

〈1組〉
今村　一也
市村　一人
織岡　一夫
神津　幸哉
河口　妙子
志村　健美
田口　英一
武田　光仁
中嶋　信子
萩原　三雄
花輪　成美
広瀬　春男
村松　資夫
望月　孝之

〈2組〉
青木加奈美
青木　晴秋
有泉　文子
井上　喜由
岩間　敏雄
大野　公子
大澤　良一
金沢　春子
塩津由美子
内藤　博文
深澤　二郎
望月　行雄
森川　浩光
矢島　英子
横内　敏昭
渡辺　章
渡辺　良樹
若林　宏

〈3組〉
秋山　義人
芦澤　千洋
淡野　元裕
石川　保
今井　一生
数野　清治
弦間　秀仁
竹下　清治
富田　保彦
内藤　治生
中沢　文明
中村　幸男
平井　和行
平嶋　道治
深沢　隆之
深澤　正樹
保坂　竹寿
松井　忠
三浦　治仁
三井　正己

〈4組〉
我孫子明子
雨宮　俊夫
上田　浩
内田　清
江間　誠二
古場　哲郎
小林　好雄
斉木　葉子
斉藤　茂樹
鈴木　義廣
丹沢　道彦
奈須　一
長谷部貞夫
広瀬　裕子
古瀬　陽子
保坂　憲治
前田　弘
松木まさみ
諸角　強英
宿沢　修
山口　富夫
山下　晴夫
吉岡　義博
依田　秀夫

〈5組〉
雨宮　俊彦
石原　修
伊藤　豊
長田　茂男
小野　正巳
志賀　雅人
清水喜美男
田中　功
内藤　茂好
名取　敏夫
内藤　浩
萩原　睦幸
早川　洋美
花輪　滋
藤島　康由
間瀬　敬明
村松　康彦
山本　秀彦
渡辺　康三
横森　万

〈6組〉
相澤佐代子
秋山　敏徳
伊藤千永子
大嶋　和子
大塚　和子
小林　哲朗
小林ゆかり
阪本　稔
名取　孝
中林　源吾
早川由美子
樋川万佐子
穂坂　勝命
向山　節子
代永　光春
尾崎　嘉代

〈7組〉
赤池　幸久
阿部太喜男
荒木　力
今井吉之助
生原　尚
笠井貴久男
河西　政和
鎌田　豊
河口　忠彦
小林　章一
小林　峻一
近藤　信雄
進藤　久和
清水　憲治
武田　有司
田中　健
田中正二郎
鶴田　千樫
深沢　又男
福田　秀夫
丸茂　皓生
道村富美男
渡辺　耀
山本　正敏
田中　健二

〈8組〉
相沢　一徳
天野　朝馨
雨宮　弘治
井口　潔
河西　道明
金丸　義敬
斎藤　省三
坂口　和彦
佐藤　吉元
佐野　健三
清水　俊夫
清水　文法
田中　清隆
田辺　譲二
千野　一男
土橋　健治
深沢　幸雄
宮坂伸一郎
向山　隆
矢ケ崎一三
谷戸　文廣
雨宮　勝美

〈9組〉
飯島　忠
石原　源彦
太田　隆雄
岡　敏彦
岡部　修造
小河原正夫
金丸　吉宗
後藤　悦子
小林　正英
斉藤　栄子
島津　信重
内藤　静雄
長沼きよみ
長沼　雄次
深澤　稔
細川　恵子
三井　正己
若尾　和光
長田　寿彦
山本　順二

〈10組〉
赤岡　猛
石井　正栄
大森　浄二
小野　松治
小林　文昭
志村　義一
鈴木　徹
高原　玄承
遠山　和男
中沢　厚男
広瀬　孝嘉
深澤　嘉彦
藤波　明
保坂　正祝

〈11組〉
雨宮　敏仁
井口　節子
石井　俊彦
伊藤　昭
井上ひろ美
長田　義人
小澤　藤雄
上笹　秀男
窪田　美文
小池　基次
桜本　安善
清水　良子
志村　郁造
鈴木　和子
丹沢　良治
土屋　一三
幡野満喜子
馬場　法子
波羅　栄次
堀口　和美
保坂　誠一
丸山　正之
望月　克充
米山　高憲
渡辺　憲子

〈12組〉
笠井　智明
佐野　公保
塩谷　政之
標　芳美
関岡美佐子
高木　悦子
玉田　一美
中井　久子
中沢　敏子
中島　洋子
深沢　永子
伏見　和江
松岡　啓子
三科　弘
山本　協子
渡辺　聡子

〈平成10年４月20日現在〉

甲府中学校・甲府一高

平成10年度同窓会総会実行委員会役員

委員長
依田　秀夫

副委員長
中沢　厚男（会場イベント担当）
赤池　幸久（記念誌担当）
数野　清治（会員券担当）
飯島　忠（総務担当）
小林　哲朗（財務担当）
花輪　滋（記念事業担当）
田辺　譲二（記念事業担当）（八組幹事）
丹沢　良治（広告担当）
内藤　治生（総会担当）
川崎　光洋（総会担当）
有泉　文子（総務担当）
渡辺　憲子（会場イベント担当）
山本　淳仁（五十八年卒）

事務局長
村松　資夫

事務局次長
大原　勝一（五十八年卒）

広告部会
望月　行雄（二組幹事）
平嶋　道治（三組幹事）
渡辺　良樹
内田　清
有泉庸一郎
小林　峻一
石原　源彦
大森　浄二
小林　文昭
深沢　稔

総務部会
桜本　安善（十一組幹事）
小野　松治（十組幹事）
赤岡　猛
新藤　久和（七組幹事）
福田　秀夫

財務部会
岡部　修造
江間　誠二（四組幹事）
長田　茂男（五組幹事）

会員券部会
三井　正己
斉藤　省三
保坂　勝命
清水　毅

会場イベント部会
笹本　森雄（六組幹事）
長沼　雄次（九組幹事）
市村　一人（一組幹事）
横内　敏昭
三井　正己
今井吉之助
清水　俊夫
小河原正夫

記念誌部会
丸山　正之
佐野　公保（十二組幹事）
遠山　和男
中村　幸夫
青木加奈美

編集後記

桜の花びらが舞い始める頃、甲斐路は桃の花で埋め尽されます。中央道で笹子トンネルを抜けるとそこは桃源郷で、今の季節、甲府盆地は、正に日本一の景観です。県外に出られた同窓生の皆様もこの景色を眺められて故郷の良さをしみじみ感ずるのではないでしょうか。

さて今年の当番幹事として何よりも嬉しいのは、恩師の十二名の先生方が元気で揃って原稿を書いて頂けた事です。記念誌は、それだけで充分読み応えが有る物となり私共の肩の荷も半分下ろさせて戴いた様な気がします。お元気な様子が文章の端々から感じられこれからのご健勝を祈念して止みません。そこで特集としては、同級生に現在の教育問題について座談会形式で語ってもらい少しでも読み易くする事を考え、更に「子供たちに未来を」では、全面を写真で飾り、目で見てインパクトの強い形をとりました。少しでも将来有る子供たちのお役に立てる行動につながれば幸いです。

記念誌発行に際しましては、広告を戴いた皆様、更に当番幹事を含む同窓生の皆様に御協力を戴きまして無事発行出来ます事を心よりお礼申し上げます。

「顧みてさらに新たなる気概を」の言葉と共に。

〈記念誌部会一同〉

編集・発行
平成十年度同窓会総会第118回実行委員会
（昭和四十一年卒・五十八年卒）
企画・制作　㈱メディア・ユー
印　刷　㈱内田印刷所

甲斐路の旅をあざやかに彩る、美と伝統に溢れたホテル。



贅を極めた伝統美と湯の香に安らぎを感じる。

石和温泉郷の中でも、一際光彩を放つ石和常磐ホテル。

館内は本格京風数寄屋造りで築かれ、甲州の「印伝」をあしらった柱や、「貴石」のモザイク画、「甲州織」の名画の世界等、心和む芸術品の数々に溢れています。

純和風のおもてなしと虹色に輝く宝石風呂で、憩とくつろぎをお楽しみください。

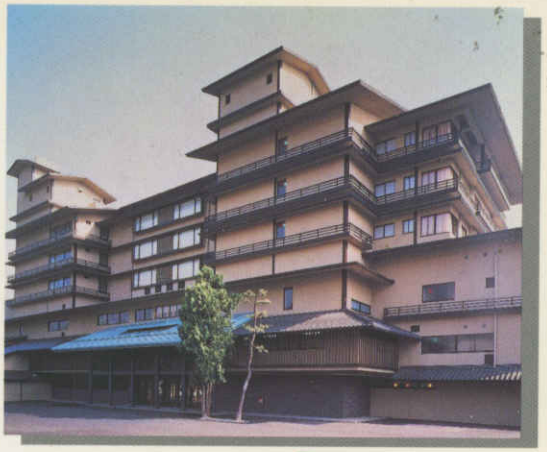


館内のご案内

- **客室数**／58室
- **収容人員**／大宴会場（250名様）2
  中宴会場6・小宴会場6
- お酒処・お茶処・そば処・バー・売店など
- **大浴場**／宝石風呂（男女）・男女露天風呂
- **防災防火設備完備**
- **大駐車場完備**

石和常磐ホテル

〒406-0024 山梨県東八代郡石和町川中島1607-14
電 話 0552-62-6111（代）



松を基調とした緑園が旅の情緒をほのかに温める。

甲府の湯村温泉の常磐ホテルは、各部屋から松を基調とした優美な日本庭園が一望できます。

信玄の隠し湯として由緒ある露天風呂、大浴場をはじめ、庭園の眺めを楽しめるメインバー、ギャラリーなど施設も充実。日本の情緒豊かな趣をご堪能いただける、伝統あるホテルです。



館内のご案内

- **客室数**／50室
- **収容人員**／250名様
- **宴会場**／大広間「桜」中広間「菊」「楓」「曙」
- **結婚式場**／神前挙式場・写場・美容着付け室
- **離れ**／5棟11室
- **その他**／食事処「竹葉亭」メインバー・ラウンジ
  サロン・ギャラリー
- **大浴場**／男女大浴場・男女露天風呂
- **防災防火設備完備**

常磐ホテル

〒400-0073 山梨県甲府市湯村2-5-21
電 話 0552-54-3111（代）